江戸名所圖會

十二

農務省圖書共第號冊
商印

太政官文庫
和書門
一一三八七號
二冊
九架
函

内閣文庫
和書
一一三八七號
二〇冊
九架
七四函

内閣文庫
番號 和 11387
冊數 19 (11)
函號 174 31

国立公文書館
National Archives of Japan

戸塚　今高田ハ属す古ハ此地の惣名とす北条家の分限帳ハ
恒岡弾正忠牛込ハ冨塚の地を領せり　注せり
江戸鹿子ハ昔洪水の時此地を
ハ戸を以て冨塚と云ありて不の名も冨塚村と号く今
た〻ん里老の説ハ宝泉寺の地ハ冨塚と云ハ水沢ハ
冨を戸ハ改まると云云或人云旧岡本氏某の邸の地ハ古き塚ありく白狐の窩とも
戸塚ハ狐塚を誤ると唱ふ又此辺昔古塚多くあり十塚と呼ぶ
へしとも云ふ　按ハ狐塚とのハ水稲荷の社の傍ハ塚のもとにんの高田雲雀
とも云ふ草紙ハ戸塚の祠ハ宝泉寺にあり此ハ狐の形の石の扉あるハ昔より戸塚といふとあり

百八塚　今其所在さ〻ず

佛ハ供養の為此高田の辺より大久保迄の間ハ〻く百八負の塚を
築くと今ハ悉く所在さ〻ず

按ハ中野村熊野十二所権現の別當ハ成願寺と称る禪林あり其寺記ハ鈴木
荘司重邦の後裔鈴木九郎と称る者あり紀州藤代ハ庶永の頃武州
ハ来て中野の地ハ住す家大ハ冨を蓄せり宿因ありて其娘夭死す
九郎大ハ歎き居宅を壊ち精舎とし女の法号正観を以て寺号とし自らも
又名を正蓮と改む昌正同音なれハ此百八負の塚と若くハ此人の
造立なるか　或云今馬場下町を供養塚町と唱ふるも旧称の残なるハ彼供養
塚を冨塚と号けしも冨民の制なるハ疑ふ此地を昔冨塚と号へしを中古より美の一字を畧して登津加ハ唱へ
来りしなるべし

高田天満宮　同所八幡宮より馬場の方へ行道の左側ハあり別當を

真言宗ゆゑに真定院と号し神躰は菅神手造の霊像あり
一寸八分ありと云相伝ふ寛永の頃　大樹此神像を大橋立慶ふ
賜ふ　此立慶は八木堪能の人やはり大橋流筆法の始祖なり菊岡沾涼の説に按ふ
息男大橋長方博士重政伝家流と称せり　依て立慶當社を建て神前に懸る和の戸帳に其旨
趣を記し置とのべり　當社の旧地は牛込清松寺の辺り今天神町と唱ふる地
記せし文に祐筆大橋立慶ふ高田大炎の屋敷を望海無諍といへり　冊子に寛永七年の事実を
とあり地は天神の宮あるを記せり　証とすべし　又菅神の真筆の佛経
を収むる由云へども　社前にある所の龍神及び鬼子母神等の石像は
昔此地に経蔵ありし頃守護の為に造立せしものゝ
按に當社の傳ふは大橋立慶大樹より清松寺の地昔は大橋氏の宅地なりしに南向
とあり旧地を天神町とす土人伝自らの宅地ふ太宰府の天満宮を迎しまつる
亭茶話に云大炎宗五郎義延は元孫二年開板の江戸鹿子に奉納の三十六歌仙の額
地を天神町と号く後高田ふ移し元孫二年開板の江戸鹿子ふ二百余年ふ及ぶ
も今猶存あり　再び按ふ大炎義延は文孫の頃の人なれば宅地ふ相違なし
とあり依て考へふ大炎義延自らの宅地ふ太宰府の天満宮の神像をその社ふ安置し
を後大橋氏歟ふ居住し　大樹より北の方ふあり　追廻しと称し二筋あり竪は東西へ
高田馬場　同し　按寛永は寛政の今ふ至て未二百年ふ及ぶ

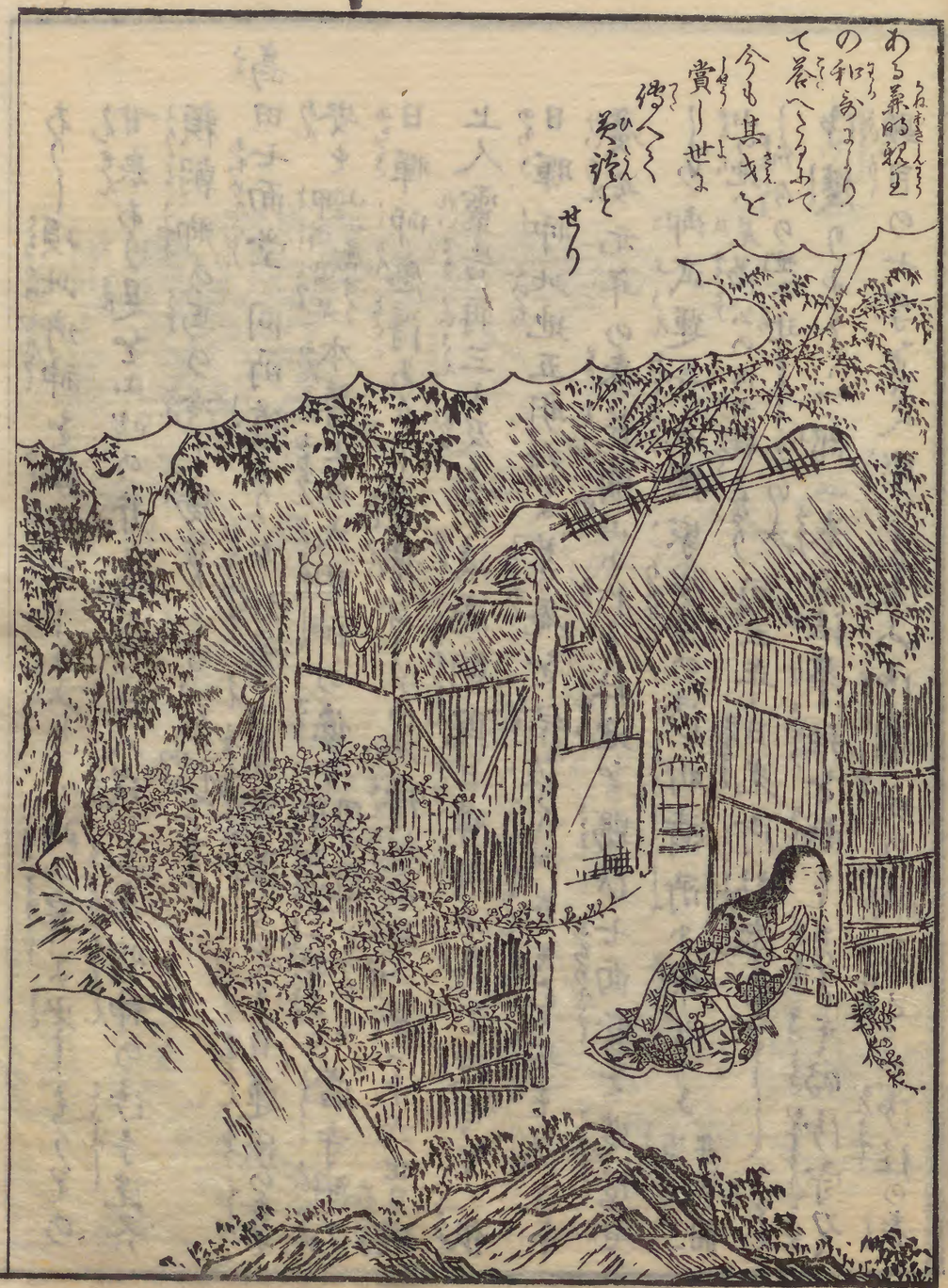
六町ふ横の幅は南北へ三十余間あり相伝ふ昔右大将頼朝卿隅
田川より此地ふ至る軍の勢揃あり旧跡なりと土人の説に
慶長年間越後少将忠輝卿の御母堂高田の君遊望の館として開き
ら〻ゑの芝生なりし寛永十三年ふ至て今のごとく馬場を築き
弓馬調練の所となさしめらるゝ
たりと云北の馬場は武田信玄入道小田原の北条家を攻る時馬を試
旧跡なりと云北の方の松の列樹は享保の頃吉左衛門等是を司り祭る
たゝめふ是を殖らしめ延宝天和の頃雑司谷鬼子母神の社ふ
賭的大的小的騎射弓能雑子土佐外記放下の類多し
大将軍家御代の始ふて國家安全の御祈禱の為ふ嘉例とし
此地ふ於て流鏑馬の式あり形装善尽し美を尽せり式の図説は
穴八幡の別當放生會寺ふ収蔵せり文章は神田白竜子撰
ふなり
按に此地を高田と唱へ近隣の帳ふ太田
新六郎の領の中に高田内赤沢分同添田分の地を注し加ふ又赤沢千寿領
ふの江戸高田は千寿成人の間赤沢後家ふ附もとあり又此地を中村平次郎
と云人も領同書に

高田馬場

和田戸山　尾陽君侍館の地なり是を戸山御邸と云（戸山或ハ外山ト作る）土人相
傳ふ此地ハ往昔和田戸何某とゝやいひし武士の住しゝ所ゝ右
大将頼朝卿隅田川より此地に至る和田戸が第に入給ひ軍勢の
労を休められしことあり（今平地ハ和田戸明神宮社ありと云）高田馬場の
南尾州侯山屋鋪へ行方の畑の中に一條の道あり里老傳へて
上古の鎌倉海道なりとゝへり
荒蘭山　同所戸山と大窪諏訪の森との間をゝ此あゝりハ
雲雀の名所なり
山吹の里　高田の馬場より北の方の民家の辺をゝ唱ふ（此地今向砲利場と号）
相傳太田持資江戸在城の頃一日戸塚の金川辺に
放鷹を時携へ給ふの鷹菊ゝ飛去れバ跡を追ひゝ
こゝに来る時に急雨頻あれハ傍の農家に入ゝ簑を乞ふ内より
小女出盛なる山吹の花を折ゝ是を持資に捧ゝられゝと

詞を聞ゝ持資意を悟ゝ却ゝ憤を含ミ家に
帰り近臣に事のありゝを物語ゝ中に一人進ゝ云ゝ是ハ簑の
なきゝとゝるゝあゝん古哥ゝ（後拾遺集）
七重八重咲にけるかな山吹のみのゝ一つだにあらぬ
かゝ詠せゝ和哥の心をゝゝ谷へ帰りゝんとゝられゝ持資
深ゝく恥ゝく後和哥の道を慕ゝと云ゝ
（七重八重の和哥ハ後拾遺集に中務卿兼明親王の詠ゝ言葉書に云ゝ
小倉の家に住ゝる頃雨のふりゝる日簑ゝる人のゝりゝれハ山吹の枝を折て
とゝせゝりゝるゝ）
按ふ此山吹の里のゝハ和漢三才図會俗説弁艶道通鑑等の中に見ゆ
（神奈川戸塚の金川と皆ゝ実を流ゝ小溝を今蟹川ゝ昔ハ加平川と唱へゝり是先哲の説ゝ是非ハ詳に是を挙ゝ）
東海道の方驛
穴八幡の前を宝泉寺の方へ
三島山　同所民家の後園にあり古松四五株繁茂せる樹蔭に三嶋
明神の祠倉あり相傳ふ右大将頼朝卿此高田の地に軍兵勢揃

山吹の里ハ玉田のる場
より北の方民家の
辺とゐふ昔太田持資
江城ふわりしゝ一日
此戸塚の金川の辺ゑ
放鷹ゝ急雨ゑ遇ゑて
傍の農家ふ入り
養をとゐんゑと
ゐふ時ふ内ゑり
小女出て朔ハゐく
鷹ゑりゐる山吹の
花一枝をゑく
持資ふ捧くゐ、
後拾遺集ふ七重
八重花ハさけとも
山吹のみのひとつ
ゐふなきをゑ
ゐゐしきと



あり〜頃此御神を勸請なし奉ると云へ此山岸より少し〜もろもの
甘泉あり是を山吹の井と唱へり土人或ハ三島明神の御手洗又ハ
頼朝卿の馬の冷し場なりともいひ伝へ
高田七面堂　同所道より左如意山亮朝院と唱へる日蓮宗の寺ハ
安也（甲州身延山ハ屬せり）本尊七面大明神の像も（身延山の七面堂と云同木同作なりと云）當寺開山
日暉師感得あり〜靈像なりとの縁起云延山第二十六世日境
上人靈告再三ハ及へ後亮朝院日暉師ハ是を授与す依
日暉師此地五明村より草庵を結ひ此本尊を安也然るハ
慶安元年の春荒蘭山ハ於く社地を賜ひ七面堂を造営せ
しめ御武運長久國家安全の御祈禱所ハ命せらる（寛文十一年荒蘭
山の地ハ尾陽公の御山荘なり今の地ハ遷）同二年日光御社参あらせられ
御獲りあり〜一部一巻の法華経を献しまする御守刀と
題目の七字を彫しめ御帰城の後奉く御経の表

国立公文書館
National Archives of Japan

川沢
しもの俣

姿の見ヶ橋
川ふい
金泉記
寺院
南蛮院
川氷
姿見橋

紙の裡に七面大明神と御染筆ありて御諱を書添られて當寺にあふとあり今猶傳へて當寺三種の霊宝と仰きそむといふ

世尊堂 堂内に釈迦如来の像を安む

朝日堂 日朝上人の像を安む此堂内に於て修行する所の常題目ハ法善院日養御師の基にして紀陽君御寄附なりとそ當寺第三世円乗院日了上人常に眼病を患ひて日朝上人に寄願し平愈するを得て後霊夢を感する事ありて宗祖日蓮大士の像を日朝上人に作りてむるとあり今當寺より出す所の眼病救護の霊符を授て現益を蒙る者少からすとそ

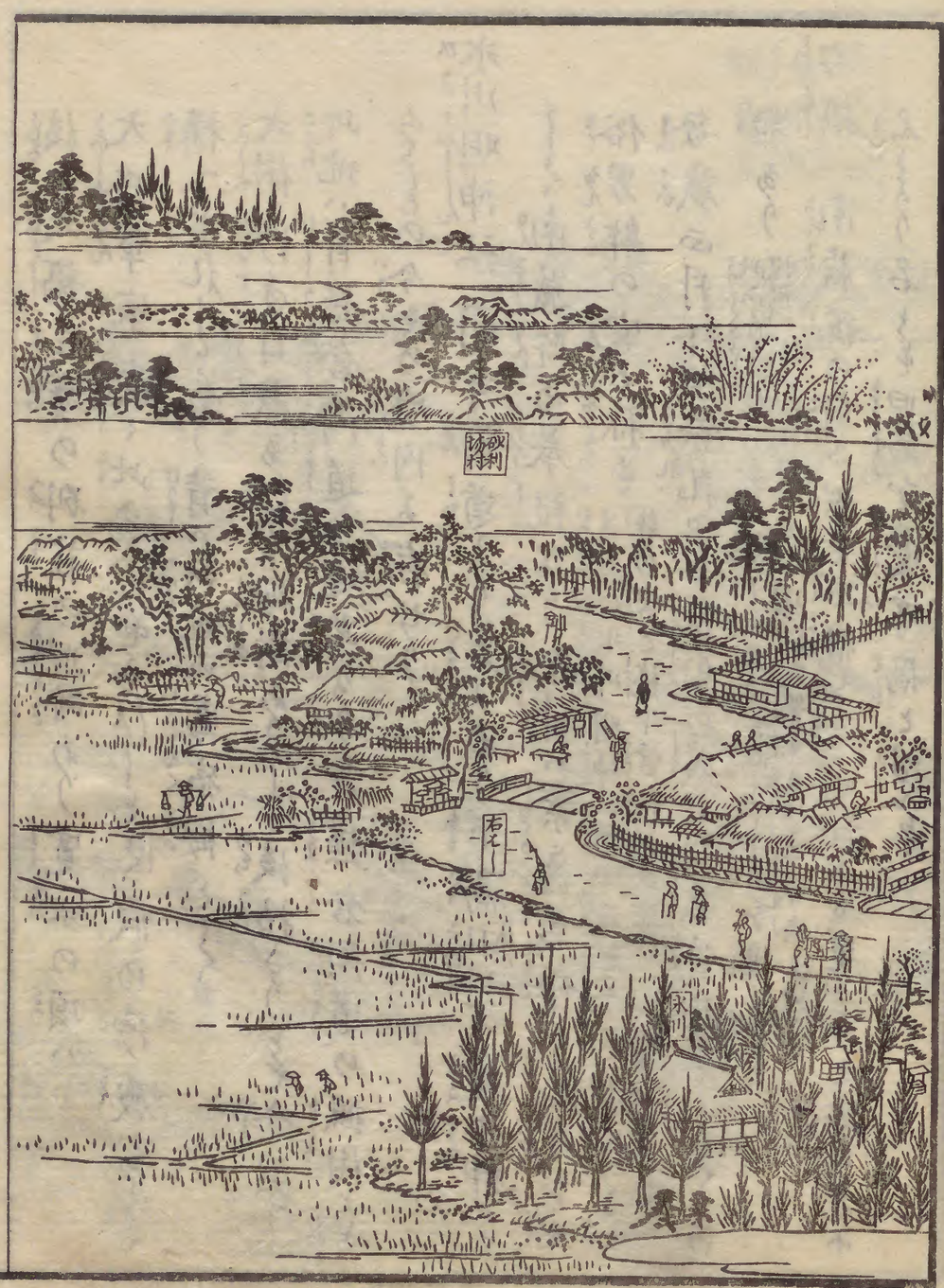
朝日櫻 同しく常唱堂の向右の方にあり日朝上人の愛樹なりといへり

傍の橋 同し北の方上水川に架せる長十二間余あり昔ハ板橋なりしか近頃ハ土橋となれり此橋を姿見の橋と思ふハ誤なり次にしるす 此辺の蛍ハ形大にして光り他にまされり

姿見の橋 同しく北の方に架せる小橋を号く昔ハ此橋の左右に池ありて其水清く流れし故に行人視れハ鏡の面に相對するかことく水面湛然たる故に名とすといへり或ハ寛永の頃

大樹此地へ御放鷹の時御鷹翦れたるか此橋の辺にて見出あひしかハ台命によりて此名を賜はせしとそ里諺に云傳ふ又土人の説に在五中将業平朝臣あつまにさまよはれし比此水に姿をうつされしより名つくといへとも信しかたし

大鏡山南蔵院 砂利場村にあり真言宗にて大塚の護國寺に属せり 當寺を大鏡山と号するハ昔此寺前に大なる池ありて鏡ヶ池と唱へしよりして此名ありしとそ又當寺を古俗八ッ門寺と異名せしハ昔此地に姿見の橋あるも是によりて起る影ありとかや大樹御放鷹の頃當寺の垣根を此所彼所より分りせしを悉く門となせしより八ヶ所に門ありしかハ異名とせしとあり 開山ハ圓乗比丘と号く本尊薬師佛ハ聖徳太子の作にして立像三尺四寸あり此霊像ハ秀衡の念持佛なりとて養和年間の頃迄ハ奥州平泉にありしを圓乗比丘諸國遊化の時霊夢を感し彼地の農家にして是を得て此地に安置すといへり本堂外陣に掲けたる薬師堂三大字の額ハ蓮華光院大僧正道恕の筆なり總門の額に大鏡山と書せしも同し筆なり當寺薬師堂の


右之

高田
南蔵院
鶯宿梅
氷川社
右搗
鶯宿梅
南蔵院

後ハ大橋立慶の別荘の旧跡あり寛永の頃ハ
大将軍家度〻此ハ入らせあらせられ〻假の御殿なと
構へ重れしとなり昔ハ此地ハ鶯宿梅と
大樹清子自栽なりし梅樹ありしが後枯しとて今ハ亦
此地ハ昔鏢倉街道の通路なりしと鏢倉街道の楓樹と号
せしもの今その境内ハ存せり

氷川明神社　同寺前道より左ハあり下高田村の産土神ハ
しく南蔵院の奉祀なり祭神ハ素盞烏命ハ〻て是を土
俗男躰の宮と称せ落合の氷川明神ハ稲田媛を祭れ躰の宮と称し當社を合せ〻夫婦宮と
毎歳正月十日祭礼ゆ〻く奉射の式あり甚賑ひ〻く古
雅なり

右橋　南蔵院の前ハ架せ石橋を号く往ゆ還ゆと右の方ハ
名とせ旧名を藁塚橋と

氷川明神社　同申酉の方田島橋より北杉林の中にあり祭神奇稲田姫命一座なり是を女躰の宮と稱せり同所茱王院に持なり高田の氷川明神の祭神素盞嗚婦の宮と土俗あやまり在原業平および二条后の霊を祀るとの説甚非なり

七曲坂　同所より蔵山の方へ上る坂をいう曲折あるゆえ名とす此辺ハ下落合村に属せり

落合土橋　同所坤の方上落合より下落合へ移道に架す土人云田島橋より一町ばかり上に玉川の流と井頭の池の下流と會流せるゆえ此所を落合の名あり按に北条家の面順役帳に奥津加賀守太田新六郎石頭の中に江戸落合の名を加へ長野弥六郎名又鈴木弥の地を頒ち神田の上水道へ玉川の上水を助水とせしハ尤後世なり此水道ハ潮く承應年中の発なり然るに此ハ落合の名の発ゆえ此両つの上水落合の義なるべし附会と知へし此地ハ螢の名あり形大にして光りも他に勝れり山城の宇治近江の瀬田にも越て玉のごとく又星のごとく乱れ光景最奇とも夏月夕涼多し

奥州橋　同寺の乾の隅に架す土橋をいう往古の奥州海道ハ水神の社の上通り黒田家の邸園に今も松の列樹あるゆえ其旧跡なりとも

宿坂関之旧跡　同北の方金乗院に密宗の寺前を四谷町に方へ上る坂口をいう同寺の裏門の辺に絶の平地あり土人云てこゝを関所と唱へ八立丁此地ハ昔の奥州街道にて頃関場なり門のあり跡あり

木花開耶姫社　同所小坂の中腹にあり按に富士浅間宮の祭神ハ木花開耶姫命なれハ浅間宮と唱へ或人云此地ハ関守の八兵衛稲荷或ハ開耶姫稲荷突棒指股及び道中日記を持て土俗ハ清玄坂と唱へ当社を又当社の宮と唱へ当社の額木花開耶姫命の六字ハ水戸黄門光國卿の親筆なり今別當金乗院に住

藤杜稲荷社　同所岡の根に傍あり又東山稲荷とも称せり霊験あらたなり頗恭指の徒多し落合村の茱王院奉祀

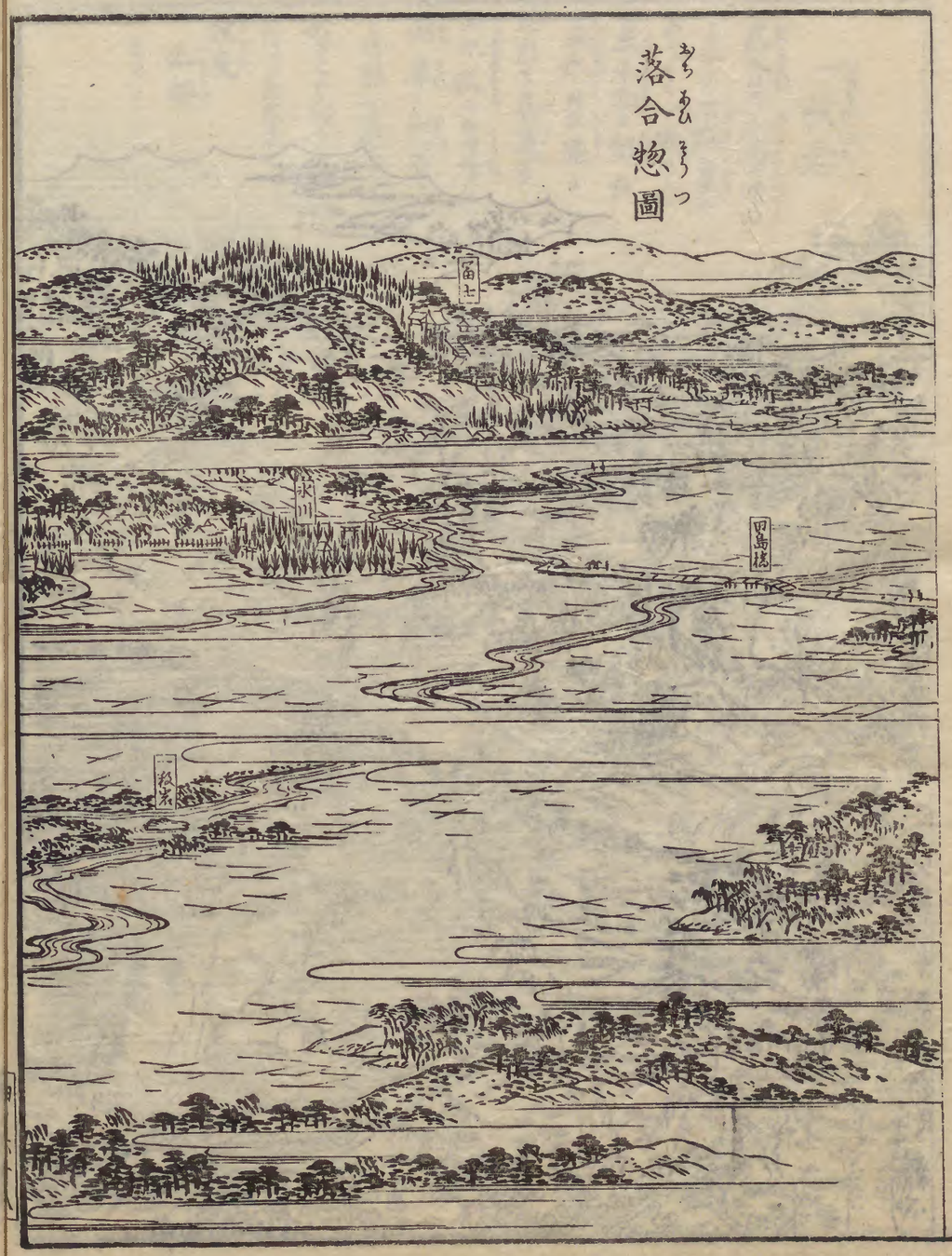
泰雲寺
古事

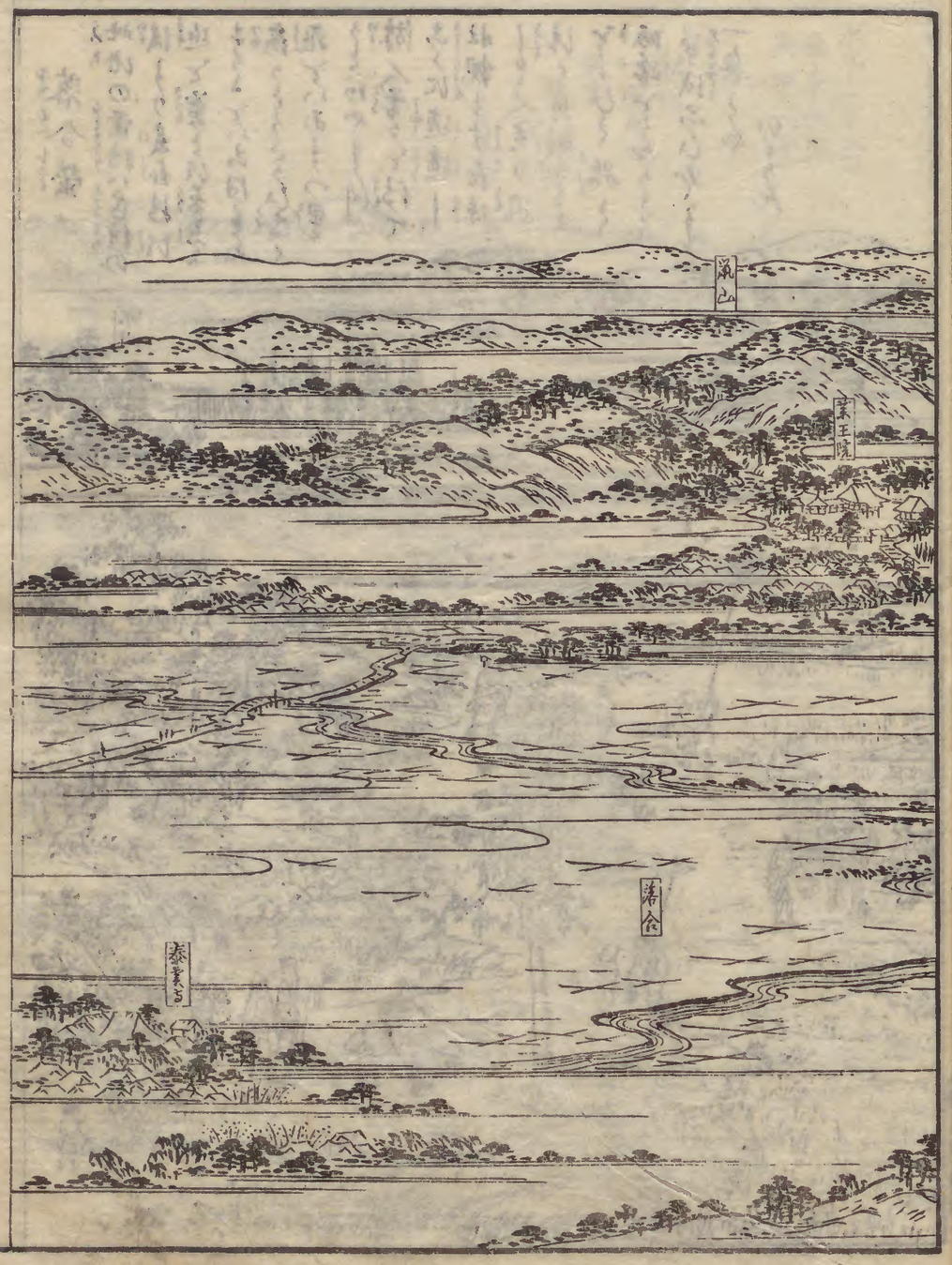
黄龍山泰雲寺　同所上落合より黄檗流の禅林ゆゑ花洛萬福寺に属せる如意輪観世音の像は天然の石仏ゆゑ当寺の土中より出現ありしとぞ開山は白翁道泰和尚と号し木庵和尚の法嗣ゆゑ二世は了然尼なり後法雲院元光尼真田氏の女に了然尼の師なり東福門院の侍女なり当寺を奥院千山和尚の師鐵禅和尚鐵禅和尚の法嗣なり黄檗を中興の開祖とせ總門に掲くるの額は泰雲寺と書せり黄檗木庵老人の書なり当寺第二世了然禅尼は泰雲院元總和尚と号し性は葛山氏駿州富士の大宮司葛山十郎義久の子同長次郎なるゝ女なり長次郎は京師泉涌寺の前に閑居し茶事を好み古画を鑒定せり頃世に画見の長次と称せしなり松屋叢話に尾張國人なり又了然は植山氏始大内に仕へ名を寄生と称ず十巻なる儒臣の母なりしなり可考後仕を辞して家に帰る江戸砂子に了然尼は東福門院に仕へ世の女房なりしと門院薨御の後尼となるの記せり人あつく婚儀を整へ松田何某なるの医生の許に嫁せしむ新著聞集に三十余歳の時男女三人の子を産せり長男逸は葛山長十郎と江戸砂子に松田晩翠とあり男女子三人を生り

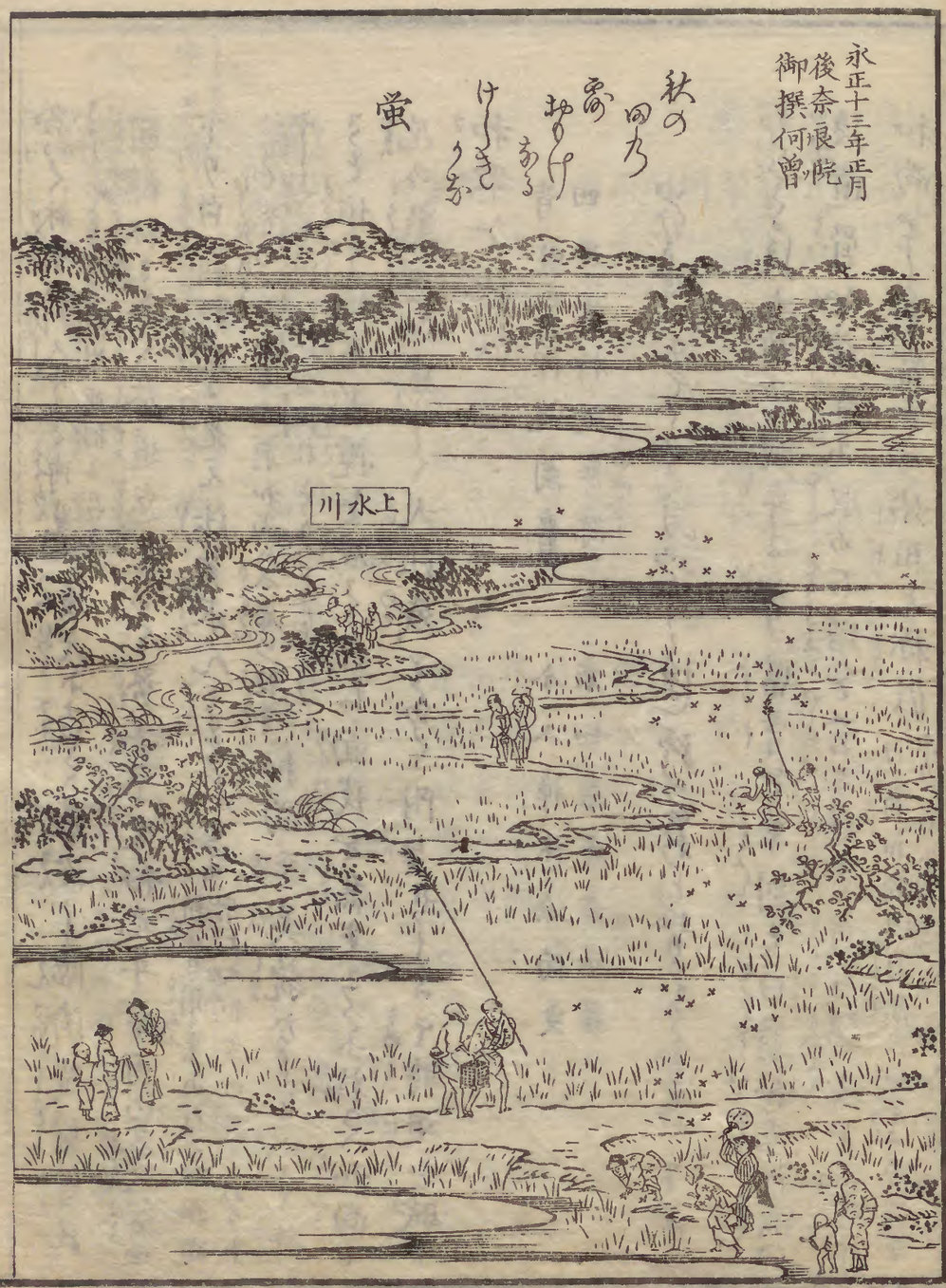
国立公文書館
National Archives of Japan

一枚岩
落合の近傍神田
上水の白堰あり
あり〳〵一堆の巨
巖水面に聳れ
藍水巖頭より
ぬれて飛瀑も
此水流に鳥居う
淵屏う渕等
その脇に名多し
此さとの故く
月の名所にて
秋夜
出類
あり

落合惣圖






永正十三年正月
後奈良院
御撰何曽
秋の
田乃
宮
おりけ
ある
けしき
ふか
蛍
上水川

落合螢
此地の螢は芒種の
後より夏至に
近と雲とに
なる
水川
山鳴滝

名つく林家の門人やゝく博覧の後夫ゝ告く羅漢ゝ臨渓黄檗等に
紀州亜相ゝ召る
諸禅林ゝ入く泰道怠るく務竟ゝ天和元年辛酉の冬大江戸ゝ
下り白翁和尚ゝ見え法を求んとそれとも新著聞集ゝ白翁和尚
紫の一衲を白翁和尚ハ水庵の徒弟 上大和侯の許ゝあり
ゝく項駒込ゝ住れ和尚を美貌なるを以く許
さを依了然尼火攪を焼く自ら面皮を焦をゝ於く和尚も
尼の懇志を感ゝく大法残るく附与せるを時頌を賦ゝ
和歌を詠ゝ

今入禅林燎面皮
不知誰是箇中移
固イ

昔遊宮裡焼蘭麝
四序流行更無跡
イ又如此ヒアリ

ゝけるを聞ゝ了然ゝ地ゝ坐せハ了然
ゝく後大悟ゝ晩年ゝ当寺を草創を白翁和尚化寂の
後遺骨を当寺ゝ収め石塔を営ゝ建く自ら銘文を製ゝ
和尚を〻く当寺の始祖と称ゝ白翁和尚の肖像ハ本堂の左ゝ
あり右ゝ了然の像と置く

自ら二代と称せり 頂ハ尼寺 尼寺の前ゝあると云ハ当寺のるを云欤
元年辛卯九月十八日 ゝ江戸鹿子ゝ比丘尼塙ハ竟ゝ正徳
号ゝ又江戸砂子ゝ了然尼市谷の末ゝ尼寺を開創し 寺ゝ大晩翠の墓
建る寺の額も此尼の筆跡なりとあるく共ゝ違へり猶考ゝく

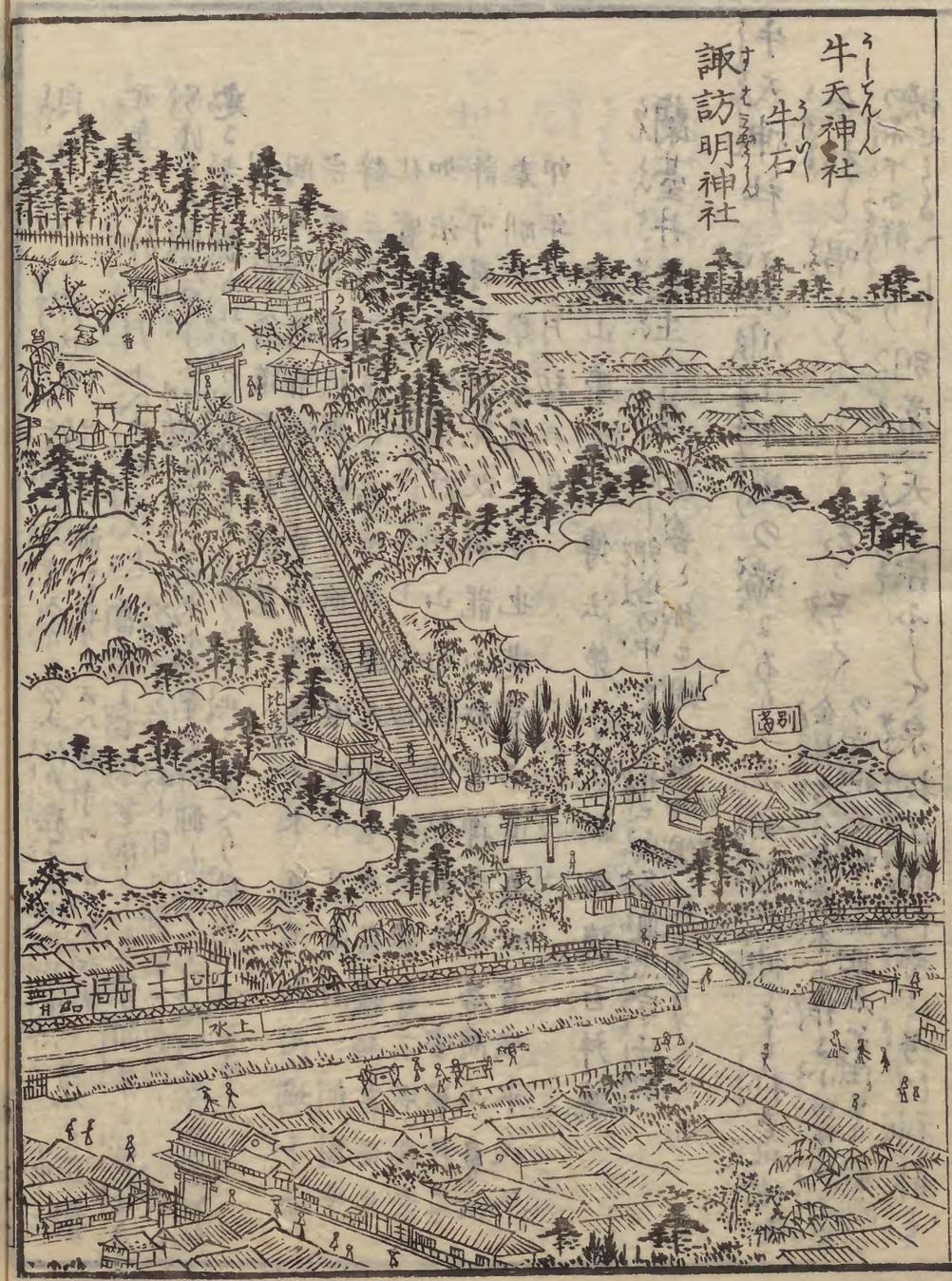
開山白翁道泰和尚墓
開山師翁者本寺第二代 賜紫本庵老和尚嫡子也
宗説共通機用殊話孤危 峻不可湊泊一朝因事
辞三州竹篦山嘉遁武陵大休庵未幾羅病書偈坐
化 実天和二壬戌年七月初三日也 總等不堪悲歎
如法茶毘但恨無開山所因伸早誠於 官家終蒙
許可再奥廃院改黄龍山泰雲禅寺以為開山鼻祖
奉 勅法類之恩之令也 建骨塔遺萬世 旨宝永八年
卯年七月初三日

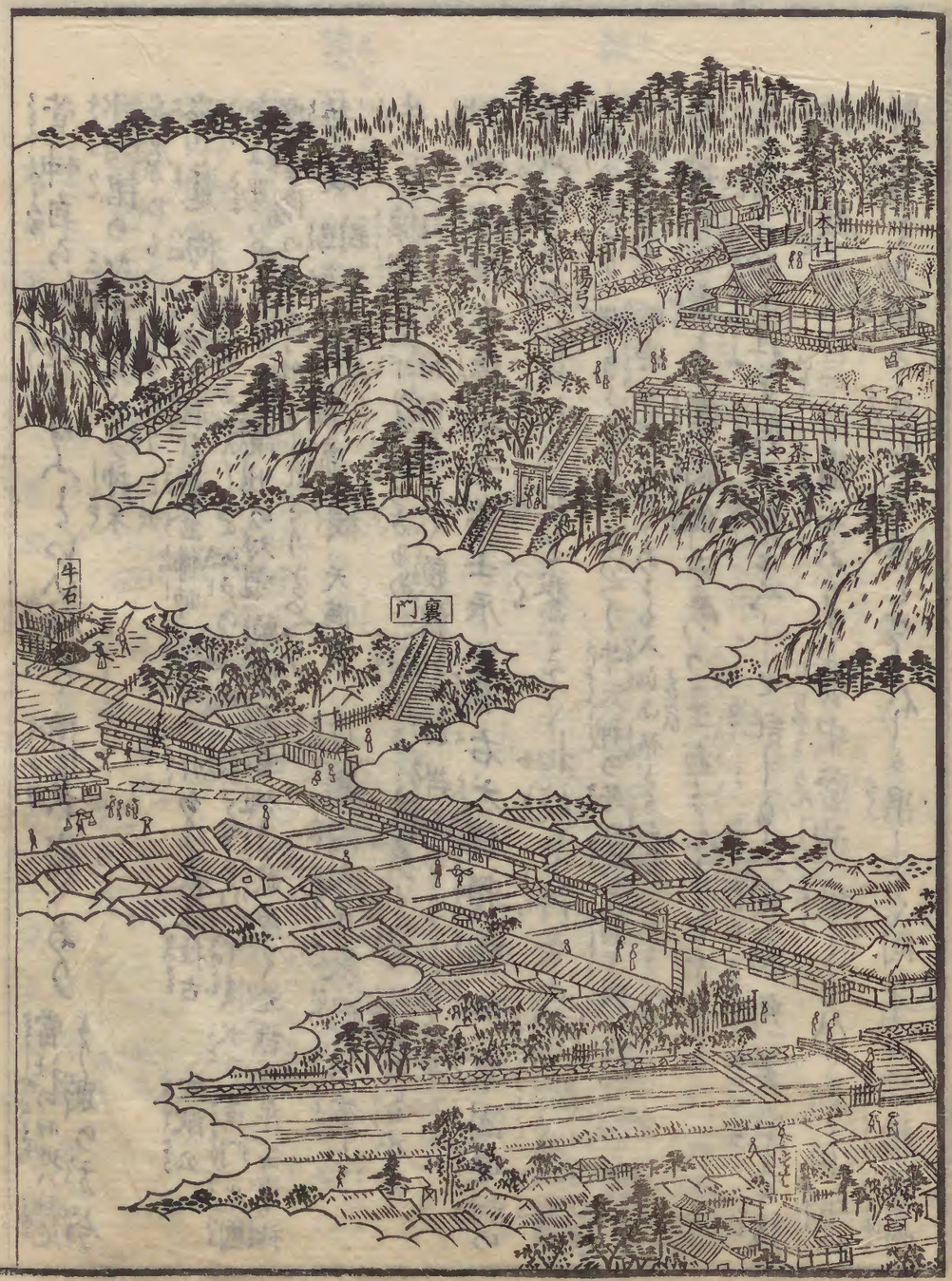
当山第二代傳法弟子了然元總百拜識

蘭墓井先生之墓 同ゝ塔の中ゝあり井上氏名通熙字子叔
嘉善と称を岡山侯の儒臣ゝ

牛天神社 小石川上水堀の端ゝあり一ゝ金杉天神とも称を此地を
金杉と唱ゝふよりく志ゝ号く金杉古ハ金曾木ゝ作る小田原北条家
の条下ゝ詳ゝ 所頃役帳ゝ此地名を注せり 金剛寺
別当ハ天台宗ゝて泉松山龍門寺と号ゝ神躰を

牛天神社
牛石
諏訪明神社





菅神自ら彫造しのふとゝひ侍り 沙長六寸あり 當社の旧地ハ社地より東の方今水府君の邸中ニ入こゝ神木

往古大猷公船繋松も同所ありと云

降魔狗 社壇ニ収む鎌倉佛師運慶の作なりと云

禁闕よりこれを江戸の大城へ移し水戸黄門光國卿より賜ふ壇上後の頃寄附せられ讃州の大守頼常君當社崇敬厚く元禄五年壬申社

華表 鳥居の額ハ頼常君寄附あり 額 天満宮 近衛内大臣家熙公筆

牛石 裏門坂の下より口隅の方ニ巨石あり名つく次の社記の条下ニ詳

南向亭云く頼朝公の腰掛石なりと云

社記云往古壽永元年壬辰の春右大将頼朝卿東國追討の時此所の入江の松ニ船を繋こゝ和波を待ふ此辺上古ハ入江ニ今の飯田町の東入堀のあゝ續きくあゝしこのゝ牛天神の外の坂を飯干坂と其間夢ニ又同所ニ蛎売坂杯ひそあるも入江ニ依る旧称なりとのゝ

菅神牛ニ乗し頼朝卿ニ二つの幸あんるを示しのゝ武運満足の後ハ必小社を営こゝ報ゆこと託しのゝ頼朝卿爰覚こゝ後傍を顧ふこゝハ一の盤石ありこゝ夢中菅神乗しのゝ牛ニ髣髴こゝ依こゝ是を奇異とせしこゝ果しこゝ同年の秋頼家卿誕生あり又翌年癸巳の夏ハ動こゝ平家悉く敗しこゝハ其報賽としこゝ元暦元年甲辰此所神を此地ニ勧請ありこゝ神領等寄附ありしこゝと云云 又江戸名勝志ニ草紙ニ北条氏康兵を起され頃夢中ニ菅神牛ニ乗降臨あり後此地ニ天満宮を勧請なしこゝを後家臣遠山丹波守當社を修營せりと上の社記ニ異

諏訪明神社 同所上水堀より南の方諏訪町ニあり 祭神ハ健御名方命なり相伝ハ明徳元年庚午牛天神の別當梅本坊乗観法印霊告あるより勧請なしこゝと云云 土人云此地旧名を忍ぶの森と云とのゝ梅本坊ハ今の竜門寺是なり 祭礼ハ毎歳正月と七月の廿七日なり

慧日山金剛寺 同所上水堀の端ニあり曹洞汎の禅刹ニして駒込吉祥寺ニ属せり 昔ハ臨済宗なり永正六年己巳曹洞宗ニ改む 本尊ハ釋迦如来開山ハ天目忠峯普應國師中興ハ用山和尚とのゝ

鎌倉右府将軍實朝公碑 後山の半腹ニあり永正の頃造立其碑面ニ誌して云く

恵日山金剛禅寺者始波多野中務忠経為鎌倉右府将軍實朝公菩提建長二庚戌年建立相州波多

氷川明神社
永川
堂
月輪寺
兄本法寺
此邊
秋田
上水
寺

金剛寺
大明神
本堂
鐘楼
総門

野荘田原村後江戸下野入道道心移寺於武州江戸荘小日向郷金杉村亦其後文明年中太田左衛門入道静勝軒春苑道灌重興焉昔日首臨済宗也其時之開山普應國師二代巨舟和尚中興叔悅禅師永正六己巳年改曹洞宗者也維時永正十癸酉年七月十日金剛現住比丘實山叟記之

金剛寺殿鎌倉右府將軍實朝公大禅定門

兼久元己卯年正月二十七日天竺佛子頼朝卿鎌倉円覚寺北地蔵堂同山の頂よりあり後ハ安置あり後金剛寺と実朝公の時彼多野より一宇を建立あり彼地より移し共ハ此地より移し

當寺ハ波多野中務忠經東鑑ハ中務丞忠經と云名あり諸家系図ハ依く考ハ波多野中務丞後五位下忠經改ハ忠経より鎌倉將軍實朝公の菩提を弔ひもうる建長二年庚戌相州波多野荘田原邑より造立せしハの精舎ハ後江戸下野入道心佛今の地より迁せしより又文明年間太田道灌當寺を重修し叔悅禅師を住持せしむ

ハ道灌の伯父故ハ實朝公及び道灌の霊牌かしひハ肖像等を置ひと云云

總門の額より慧日山と書せしハ黄檗即非の筆なり

梅花無尽蔵傳長老の注より叔悅禅師白石先生云く梅花無尽蔵

文明十七年乙巳東遊の詩の注に芳林院より出でゝ李太白の墨蹟を看る同く其下に芳林院今金剛寺と号し桜は北条家の分限帳に島津孫四郎北品川小石川及び金曽木内法林院金剛寺分なるの地を領せしと記し法林院を作る又小田原実記に大永四年正月十三日北条氏綱上杉修理太夫朝興と戰ひ勝て江戸の城に入る条下に其頃當所芳林院の孤舟和尚来て萬里居士の江亭記を捧ずとあり孤舟和尚の後は金剛院に住せしと記せり又因て考れば金剛寺と法林院は別なるべし

當寺往古は境内廣く寺院巍々として首座主閣侍者沙弥喝食維那納所行者火番あり祈祷上堂参禪の式勤め怠らずして堂塔も壮麗なりしとあり

道祖神祠　同上水堀の端金剛寺より二町ばかり西にあり　明徳年間の勧請なりとゝ雖も別當竜門寺より當社勧請の碑と称するものあり

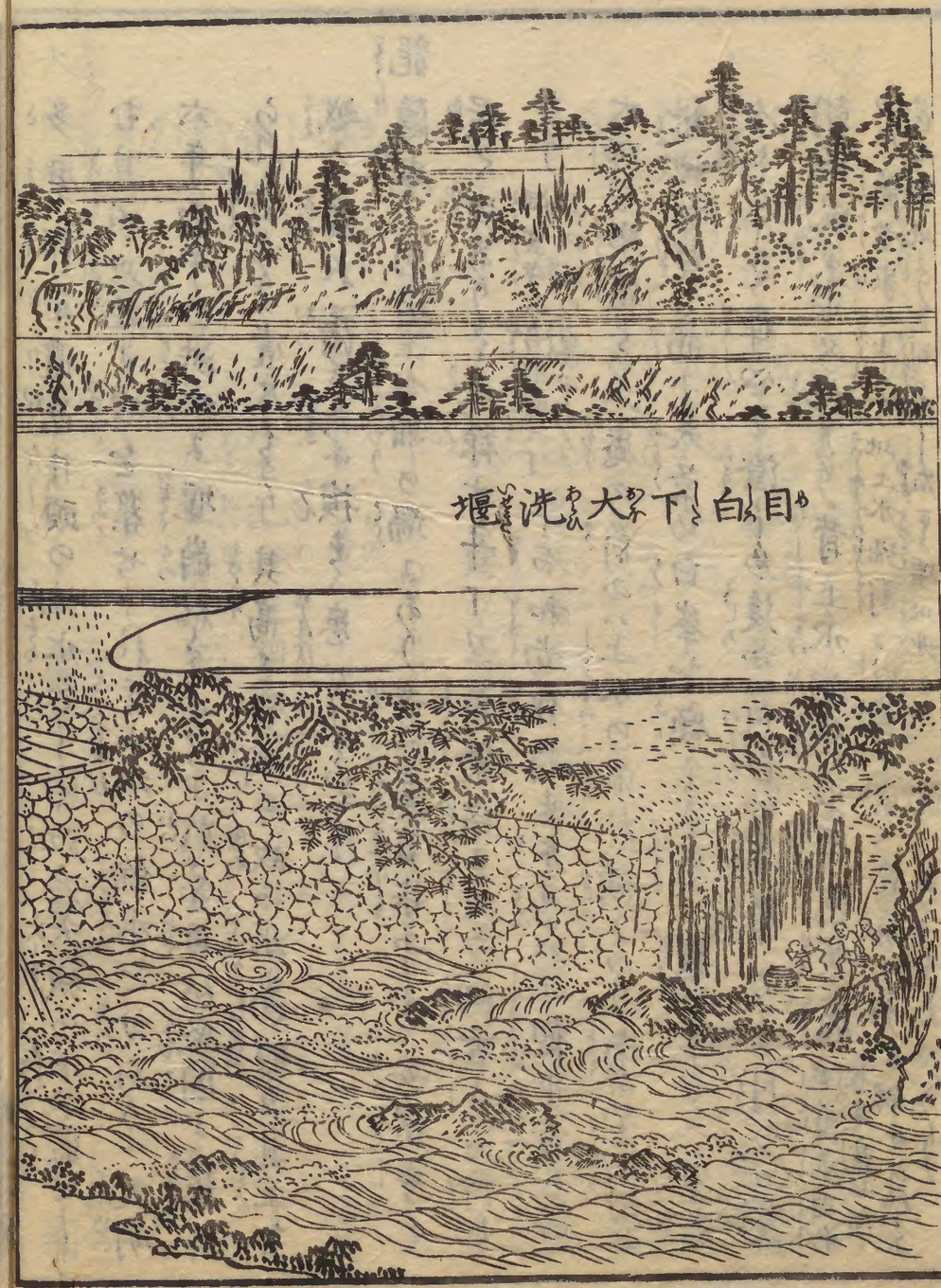
氷川明神祠　同西の方二丁餘を隔て是も上水堀の端慈照山日輪寺とつゞく禪林にあり祭神は當國一宮に同し勧請の始久しくそなはりたりとぞ中古太田道灌の再興中古小日向の鎮守

なり祭礼ハ四五九月の十七日なり（當社ハ元亀の年号ある庚申待供養の古碑あり）

大日堂　同西の方大日坂ハあり天台宗ハ覚王山妙足院と号ス相伝ふ本尊大日如来ハ慈覚大師唐より携来る和の霊像往古ハ叡山の中ハ安置ありしを元亀年間織田信長総門を襲ふ頃堂宇悉く兵火ハ罹て灰燼となれと此本尊ハ火焔を遁れ出近江國兵主明神の社頭深林の中に移ス夜〻瑞光を放ちのよりく藤原氏某感得しく其家ハ移しまつりせ旦暮供養ハ怠りなし然ハ此人嗣子あるを憂へとし此ハ祈求しく竟ハ一女子を儀く長ふ及んて紀伊亜相頼宣卿ハ仕へまつり後落飾して法善尼と号ス此尼霊夢を感ずの後當寺を開きたく安置しまつりしとなり

大洗堰　目白の涯下ハあり兼應年間　嚴命ハより當國多磨郡年禮邑井頭の池水を〻く江戸大城の下ハ通せしむ其頃此地ハ堰を築せられ上水の餘水を分ら〻天明六年丙午の洪水ハ堰崩れ〻ふ水再ひ堅固ハ築せられ古より壹尺ハ其高を減ず故ハ水嵩時ハ其上を越く流れ落ふ損ふ患なしとなり

龍隠庵　同所上水堀の端ハあり昔ハ真言宗ハ安楽寺と号く故あり〻元禄十年丁丑黄檗宗ハ改め洞雲寺の持となり（洞雲寺ハ音羽町八丁目の西の裏ハあり）平石和尚住持ハなるハ正観世音慈覚大師の彫造とふ庵の前ハハ上水の流れ横〻り南ハ早稲田の耕田を望み西ハ芙蓉の白峯を顧る東ハ堰口中〻水音冷〻と〻く禅心を澄しめ後ハ目白の臺聳へ〻り月の夕雪七朝の風光も又佳まり昔上水開発の頃芭蕉翁（芭蕉翁通称松尾甚七郎と甚七郎此上水堀割の時藤堂家へ普請のよを命せられしハ藤堂家の士なり此地ハ日く遊〻と〻



国立公文書館
National Archives of Japan

芭蕉庵
五月雨塚
駒留橋
八幡宮
水神宮
五月つゝじ
こんひら
芭蕉庵
釣船

水神

此地ハ遊ぶ人多し後世其旧跡を失ふことを歎き白兎
園宗瑞及ひ馬光なとと云る俳師此地の光景江州瀬田に
義仲寺より髣髴ありて五月雨塚と号す
つゐとなる翁の短冊を塚ハ築き五月雨塚と号す

水神社　同所ハ並ハ龍隠庵別当上水の守護神を祀る
ハ北辰妙見大菩薩を安置せ祭神ハ岡象女なり祭礼を

五月十五日なり

八幡宮　同社地なり往古よりの鎮座なり下の宮と称し椿山
八幡とも称せり　昔ハ椿多なりしゆへ椿山と号くと云祭礼ハ毎歳
八月十五日上の宮と隔年ハ修紀を洞雲寺奉祀を

駒留橋　竜隠庵の前上水の流ハ架せ此水流ハ神田に上水
なれと玉川の分水の落合ゆへ山吹の里ハ傍く流れ故ハ
弱とあるく彩ハ山のもの多し玉川なる古詠
の意をもて号けるとそ又里諺ハ右大将頼朝卿此地ハ陣せ

られ頃雪の朝此川傍を駒ハ打乗りて眺望あり奥
尽く此橋の辺より帰るとなり駒留橋と号くとも詳
なし　同所幸神の社記ハ駒留橋のうちなる獵其祭下を云なり

拾穂軒北村季吟翁別荘旧地　同所目白の臺松平大炊庚の庭中に
ありしなり山の井と称せるもの今ハ埋もれ名のみを存せり
俳書ハ増山の井といふあり此翁此地ハ閑居ありて著述
なりし故ハ此名ありとそ此辺時鳥の名所ハ外よりも
早しとなり　按ハ別荘の名を疏儀荘とす
冪口てハ別荘を求めるとそ

任ぬ家宿とゝぬ時るとそ　季吟

幸神祠　同所東の方道を隔て右側にあり一ハ道山の幸神
或ハ駒塚社とも号く祭神猿田彦大神なり庚申の日を以て
縁日とそ社司ハ宮城島氏なり相傳ハ往昔此地ハ豪民

道山幸神社

あり（今も此辺を長者の廏と云）金の駒を塚ゝ築籠榎樹を栽くかゝゝ幸神を
勧請す（当社の神体ハ昔此麓入江なりし頃其水中より出現あり）古へ此辺鎌倉
海道なりし故ゝ道山の号あり（今も松全躰ゝ蛎殻の類付てあり）と云
の下ゝ絶の叢祠のゝ存せしを頃の神主政泰なる者今のゝく祠を
営ゝ建るとの（里諺ゝ云延宝の頃金の駒の精あり此辺の田畑をあれ
谷と唱ゝ又橋の上（里民是を数度なり）其駒の形方を橋を駒留橋といふとなり）
目白不動堂　同所東の方よりあるく堰口の涯ゝ臨む真言宗ゆゝく
東豊山新長谷寺と号ス（長谷小池坊の寺）本る不動明王の霊像を
長ハ弘法大師の作徳門の額東豊山の三大字ハ南岳悦山の筆
す
縁起云弘法大師唐より帰朝の後羽州湯殿山ゝ恭籠あり
一時大日如来忽然と不動明王の姿ゝ変現し滝の下ゝ現れ
大師ゝ告て云く此地ハ諸仏内證祕密の浄土なれハ有為の猛火を
故ゝ凡夫登山せゝ今汝ゝ無漏の上火をあゝ

早秋遊豊山
長谷寺偶然
成詠

偶乘秋景入山林
盡日曾無俗吏侵
巖下清流堪濯熱
況傾河朔酒杯深

春臺

乙〜と宣ひ持〜の〜ふの利剣をとつく左の肱臂を切るへハ
靈火盛ふ燃出るく佛身ふ充てり依く大師面前ふ出現の像二
軀を摸刻〜一躰ハ同國荒澤ふ安置〜一躰ハ大師自ら護
持なる〜の〜ふ後野州足利ふ住せる沙門某是を感得〜く
奉持せ〜る一年靈感あるを以く此地の住人松村氏某ふと
かり竟ふ一宇を開く此本尊を移〜安置なる〜ふるとく
往古松村氏夢を感〜ふ不動明王を野州より此地ふうつ〜ふ頃沙門
某ふ途中嵐の為ふうつ〜ふの袈裟當山の榎の枝ふかりくあり〜しかハ有
緣の地〜んすを推知〜地主渡辺石見守某へ此地を石見守その乞ふ任せて
藩邸の地を寄附あり〜とかり今の境内是なり袈裟掛榎と称せるそ則此樹ふ
名とせり
當寺ハ元和四年和州長谷小池坊秀筆僧正中奥あり〜頃
大將軍台德公の嚴命ゆより堂塔坊舍悉く建立あり〜和州
長谷寺の本尊と同木同作の十一面觀世音の像をうつ〜新
長谷寺と改む　大將軍大猷公目白の号を賜ひ元禄の始ふハ
桂昌一位尼公御帰依浅〜ふ諸堂修理を加へあひ丈余ふ
地蔵尊を安置なる〜められく此地麓ふを堰口の流を帶ひ
水流深〜と〜く日夜ふ絶を早稲田の村落高田の森林を望ム
風光の地なり境内貨食亭多く行ふも涯ふ臨ム
開口八幡宮　堰口目白坂の半服左側ふあり神躰ハ佛工春日の作
なりとかり當社を上の宮と称を下の宮ハ先ふ関口水道町鎮守ふ
〜く祭礼ハ隔年八月十五日ふ修行を當社も下の宮ふ同〜く
洞雲寺奉祀〜り
大塚　小石川原町の辺より護國寺の辺迄の惣名なり　或人云古へハ大塚の地東
西ふ甚廣莫の地なり〜とかり雞声或人云今の水戸大学侯の
邸の辺を東大塚此辺西大塚と称せ〜と
藩邸古の奥州街道ふく榎木の大樹あるハ本傳寺日蓮大士傳起ふ云く
則大塚と云ハ是なりと大塚の地昔ハ富士見塚又南向亭云く
安藤對馬侯の東の方森川氏の構の中ふ一堆の塚あるを〜

目白坂
関口八幡宮

とも紫の一かは塚の上は不動堂ありとかのれハ今の波切不動なる此地大塚と称せる旧跡ゆや相伝ふ太田道灌相図の狼煙を揚る料ふ築くる塚なり故ふ昔ハ太田塚と唱へるると或ハ又鎌倉ゐ軍守邦親王乱をさけく武州比企郡大塚村ふ逝去せ其廟を王塚と称せるふ大塚と号くるも此類なるんとのくるも詳なるハ

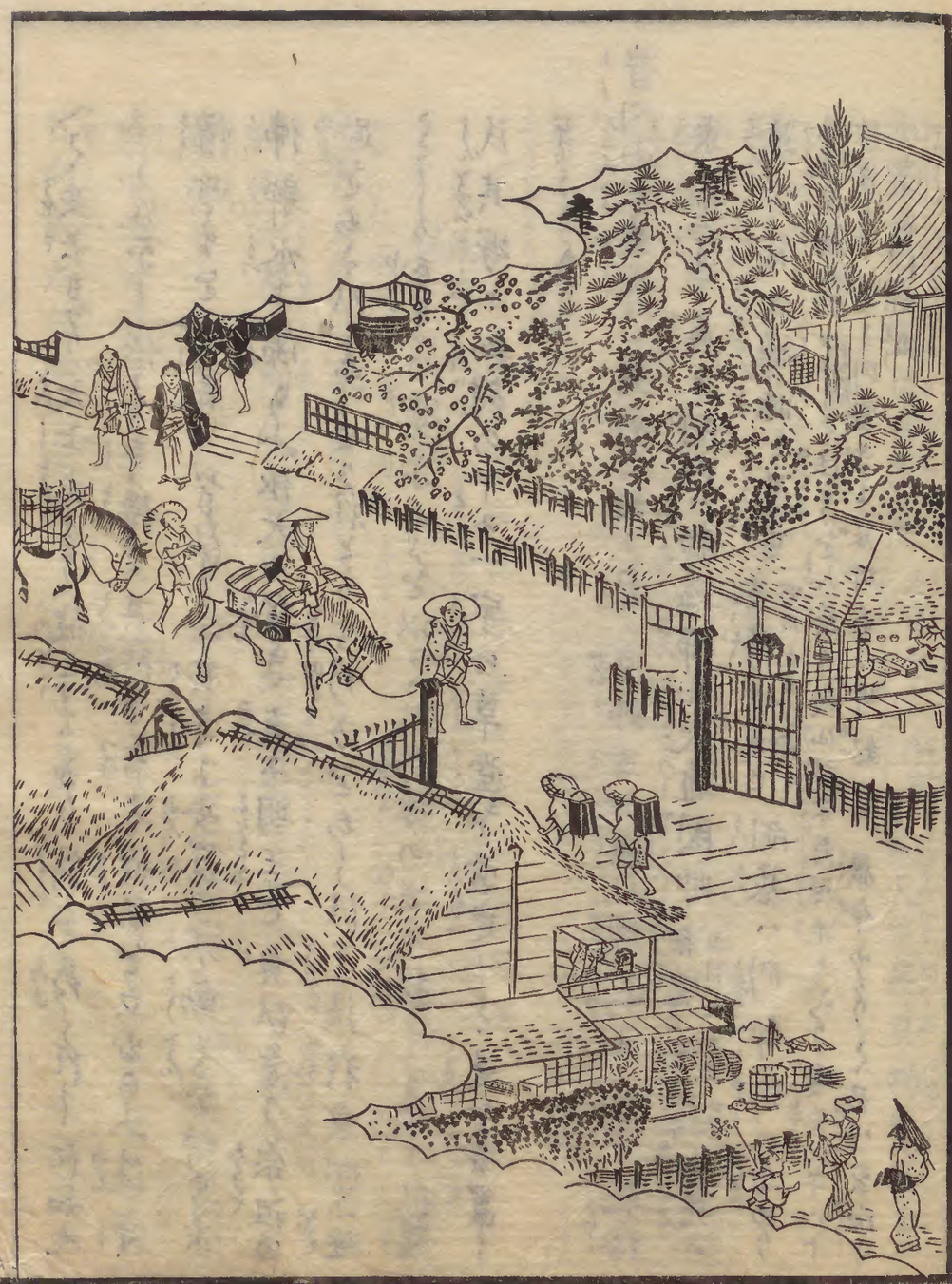
江戸の内大塚の名多し可考

大法山本傳寺　大塚町横小路にあり日蓮宗ゆゆく駿州蓮永寺ふ属せ昔ハ禅宗ゆゆく重光山善性寺と号く元和年間瑞應禅師今の宗風ふ改し自の名を法仙院日行と改め寺号をも本傳寺とす

経讀日蓮大士　縁起云く往古當寺中興開山日行上人始瑞應禅師と称せし頃蓮師の宗義を鑑ミ覚悟の要路ハ法花ふ限るを發明し宗風を羽せんとせんとるふ心決し

国立公文書館
National Archives of Japan

かゝる依元和三年丁巳四月三七日の間不動明王の宝前に
おいて法花三昧の行を修し同廿五日結願の夜の夢に
明王姿を現し師に告て云く汝前生ハ法花の行者たり
臨終の期に至て唯空永滅の念を起し謗執に
因て空無の見に墮ちたれども今宿世の妙種あるに本
心に帰り速に権宗を捨て実教に入へし我も久しく
妙法の醍醐味をあまんぜんを願ひて正に今一乗の法
蓮を開うんとまるの時至れり社壇の艮に當て基を開く
べし地必妙経讀誦の霊音あり不測の像を感得す
へしと云く師終に此霊夢に依て心を決し同廿八日日遠上人に
謁して受戒し号を日行と改む（日遠上人ハ駿州貞松山心性院の寺主なり）又霊示に
任せ同年六月一宇を開うんとして其地を卜せしに同十三日の
夜土中忽然として妙経讀誦の霊音あり翌て待て地を
穿つに数尺果して此霊像を得たり（此不動ハ世に波切不動と称せり次の条下に一宇の香堂を営て是を安置すと云云）此霊像何人の作
か頃日行上人一百日の間法花懺法を修し霊像師の夢に告て曰く汝宿
縁熟して遠く吾像に値遇せ我を菴に請て教化を受て師壇の堂
前に一人の信士あり明王の告あり下総へ趣き頂此地不動の堂
内を拂ひ堂前の松樹を拔て我像を彫造して彼信士に
拠与せり汝之感得せるの像を則これ示す云云
竟に大士の手刻
波切不動尊　同所大塚町の通を道より右に入り別當ハ日蓮宗通
玄院と号す
縁起云此本尊ハ始勢州一志郡小幡村大乗寺に安置あり然に
建長五年の春日蓮上人伊勢路を過ぎて霖雨ふく宮川の
水まさりしかハ渡すべきあるを時に一老翁来て云く
師川を渡らんとすれハ我れ水を切の術あり／／と則師を誘
ひしたがひ水上を渡しに
翁の住所を尋ぬるに小幡の山寺に住せるとのこと



国立公文書館
National Archives of Japan

へく失去まり大士夫より彼寺より翁を尋ねしに知人
なしと依く寺僧より其故を告く彼所を立出の後寺
僧此事を不審より其寺より安置の不動を拝せるに
佛躰水に濡の依大に驚き直に明王を負ひ奉り宗祖の
跡を尋ねひ奉せられとも行方を知ず後移東國に趣
こしに本尊の霊示あるを以く此大塚の辺に移し奉る農
民其塚上松樹の下に一宇の草堂を営建し是を安置し
奉る

普門山大慈寺　同所上町にあり京師五山派の禅刹なり花洛
東福寺に属す開山は勅諡佛知大通國師　観應二年辛卯五月廿五日寂中興へ
萬古昔大禅師と号す　兼應二年癸巳四月十日化寂也　開基は刑部卿の局なり
天寿院殿の侍女法号を大慈寺殿仙林栄寿禅尼と云り　慶長四年八十
餘歳にて逝去則當寺に墓碑あり碑銘は　厳命にて品川東海寺
の澤庵和尚撰

本尊葵正観世音菩薩　座像三寸あり　南天竺毘首竭磨又は唐の
智文會智首勲の作なり
鎮守日吉豊國両社　社人内藤氏奉祀す
造酒地蔵尊　寺境見耕庵の本尊なり　天竺佛なり
原北条家の頃品川の海底より出現あり後大清哲禅師住寺の頃葵正観世音像は往古小田
原北条氏大夫の家へ賜はせられ守護の為見耕庵を建立ありてこゝに
其頃或夜佛告曰く　当家信敬厚く當寺
正法千歳在佛在世　像法千歳遊龍宮海
末法中救此界衆生　今世後世令離苦悩　厳命にて造酒の二字を
かぶせ此酒を好こゝろ造酒の二字を額に掛る　称せ
祈願あるものは必酒を捧げ奉る　當寺は浄土宗にて今も
縁起云葵正観世音菩薩は昔時行教律師天竺より携来せ
霊像なり　欽明天皇已来相続して右大将頼朝卿及ひ足利
家は信心夫より後代この　将軍家崇信厚しとあり中古
日向國志布施の龍與山大慈寺より其後又花洛東福寺の

支院三好山長慶寺のかるるを
東照大神君御崇敬まして竟に江戸の大城へ迁座なしめひ
毎月十八日天下泰平此御祈祷として観音懺法等を修せしめ
らる殊更葵の一字をも附しめひ天壽院殿も御信心浅うし
さうしてあり慶安二年當寺を創しめひ刑部卿の局を開
基とのされ此かるを當寺より移しまつりとうり
と引く創基なしまつり山号をかされ天寿院殿御菩提のる御堂料を
附せられしとなり

鳩巣室先生之墓　同所坂下町の北の裏少し北田の上よりあり傍ふ

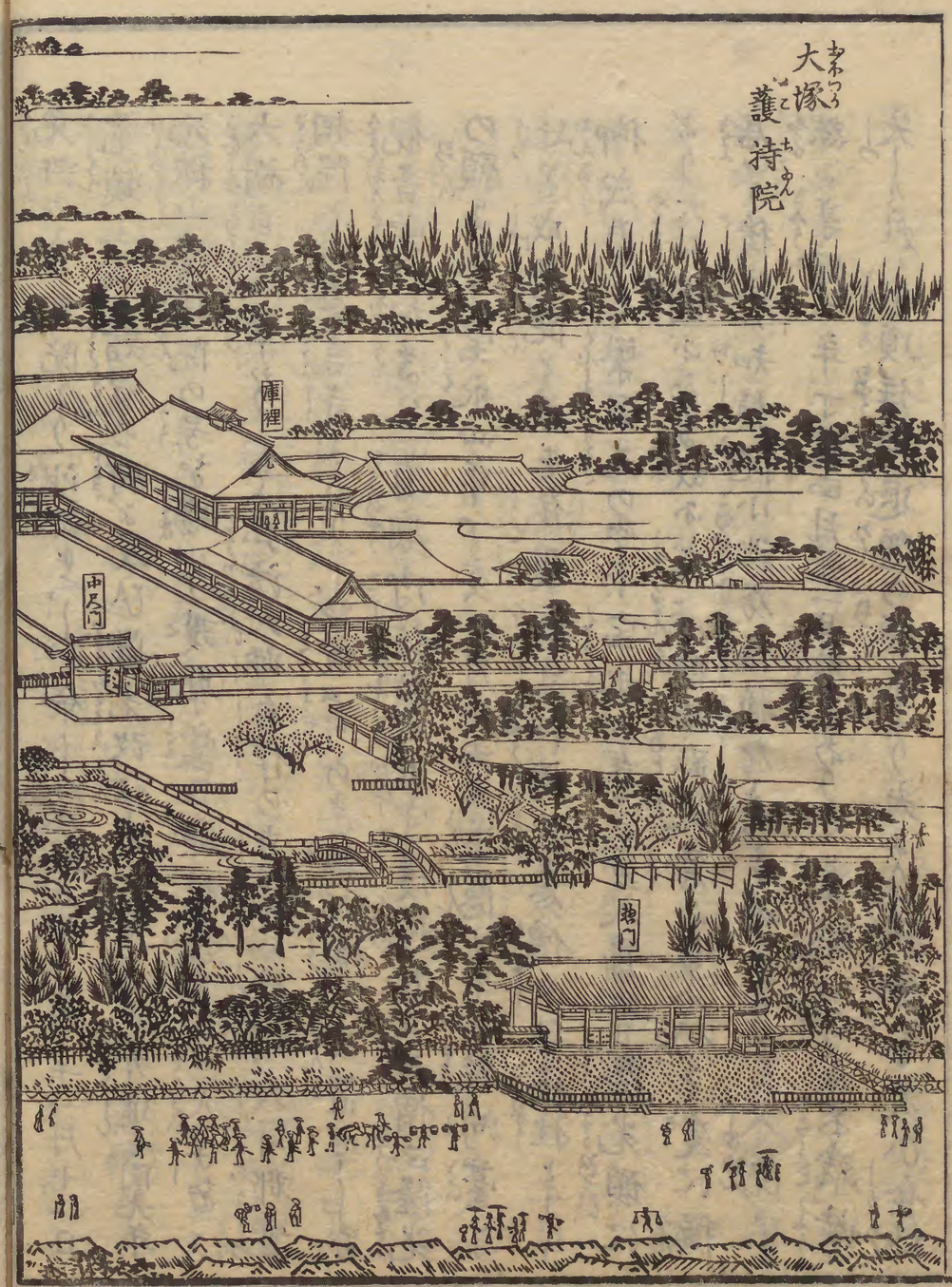
息男忠三郎洪謨の墓もあり
先生姓ハ室氏諱ハ直清字ハ師禮鳩巣と号を通称ハ新助奇を命じ、静倹
其先熊谷直実の裔ゆ、備中國英賀郡ふ出つ考諱ハ玄撲草庵と号し
北ハ平野氏萬治元年戊戌江戸谷中邑ふ産す異質あり睿智敏人ふ絶せ加藩ふ入て
宦業を木下順庵先生の門ふ受け京師ふ客くり討論の暇大学新疏を著し
章句の蘊を発し德元年東臺の徴ふ應じ来つて江府ふ就く往復贈答の什積て
类裝を成せ應對流々うめし大東振古ふ以て大東文明の美を耀し
邦國治平の盛を聲し其風海表ふ播し是を典籍ふ宣ふ足
有德公統を継く後特ふ先生を撰く當中侍講を授く此職の設蓋此先生ふ
始る嘗て釣旨を奉し五倫五常の名義を疏記ふ國字を以し書成く
是を奏せ又六論衍義大意を述官命し、是を鏤め天下ふ布せ是より先論孟
中庸及ひ易経廣義を著せ考訂ふ及ひ先災ふ罹し亡く先生偶ま疾を
感し重ねて稿を属せ侵淫日ふ甚しく終ふ以て愈せ疾を陳
病間駿臺雑話を著す旨あり是を徵せ因て以て奏せ又大極図述を著し
徧を成せ濂閩千載の秘を弘闡し後学を来せふ俟此乃先生の絶学なり享保
十九年甲寅八月十二日駿臺の賜第ふ卒せ年七十八州の豊島郡大塚里ふ葬る
以上鳩巣文集前編伊東貞薫氏の叙ふ出づる其要を摘く記す

筑波山護持院　音羽町の北ふあり　真言宗ふして和州長谷の

一汎なり寺領千有五百石を附せらる
本堂本尊不動明王（作不詳往古ハ如意ふ釈迦佛を安せしと云）
歓喜天（同右ふ）　蟹ヶ池（庭前の池なり又せんくとも唱へし）
當寺建立ハ此地の名とせりくとも
權現山（後園小岳なり）　安置しまつる自ら東照大神君の正真の御髪を
當寺開祖權僧正光誉ハ和州初瀬寺の西蔵院ふ住職あて
植し御帰依浅うして江府ふ召れ常州筑波山の宿寺を下し
則知足院と号す　其始知足院宥俊ハ下野國筑波山中善寺を兼

帯し真言新義四箇寺の支配し慶長の始　大神君の
嚴命を蒙て江城の護持所と定させられ同庚戌の年江戸
銀町ふ寺院をのゝ（其地未考九軒町の辺か）依光誉知足院を迁し営建を同
癸亥年大坂御陣の頃も光誉命を受て御陣中ふ於て祈
祷せ其後寛永三年丙寅　大猷公諸伽藍御建立あり
延宝二甲寅年　有廟御再修あり〻し天和五年壬戌十月
火災ふ罹るよつて貞享元年甲子湯島切通ふ移しのゝ（今の根生院の地）
憲廟御帰依浅うして元禄任元の年神田橋外
武士屋敷の地ゑ移され松平若狭守仙石越前守ふ命せれ
護摩堂祖師堂観音堂経堂灌頂堂鐘楼堂二天門坊舎ふ
至迄金銀をちりちめのひ隆光を開山とし権僧正ふ任せらるゝ又
護持堂ハ建立あり〻く釋迦佛を安せらるゝ同四年八月寺領千五
百石を附しのひ院家ふ列し関東新義惣録とせらるゝ色衣
免許のゝ当院より沙汰せと命しのゝ同五年壬申十二月十二日
覚鍛上人贈官の時ゑ及ひ隆光改任し大僧正ゑ昇進せ同九年
元禄山護持院の号を賜り護摩堂の額護持院の三大字を
大樹自灑筆なしのゝ弘法大師自作の真像ハ濃州大野郡實
相院と云真言寺ゑあり〻しを取寄られ祖師堂ふ安置せし
観音堂のかゝるハ　有廟御信敬の御守護佛なり大僧正隆光
の願ゑより宝永四年丁亥二月廿五日退隠し〻く駿河臺ゑ
迁せ成満院と号せ依護國寺住持快意僧正を後住と
御成あり〻く繁昌先のゝし宝永六年己丑八月六日隆光願に
より大和國ふ移る故ふ成満院の跡快意ふのゝ仍て爰に隠
居す後住ハ知積院小池房住職たり〻く命あり〻く入院す
然ゑ享保二年丁酉正月廿二日火災あり〻く堂塔一宇も不残焼
失し〻れハ其項住持退隠の願ゑより夫より後寺号及ひ食禄

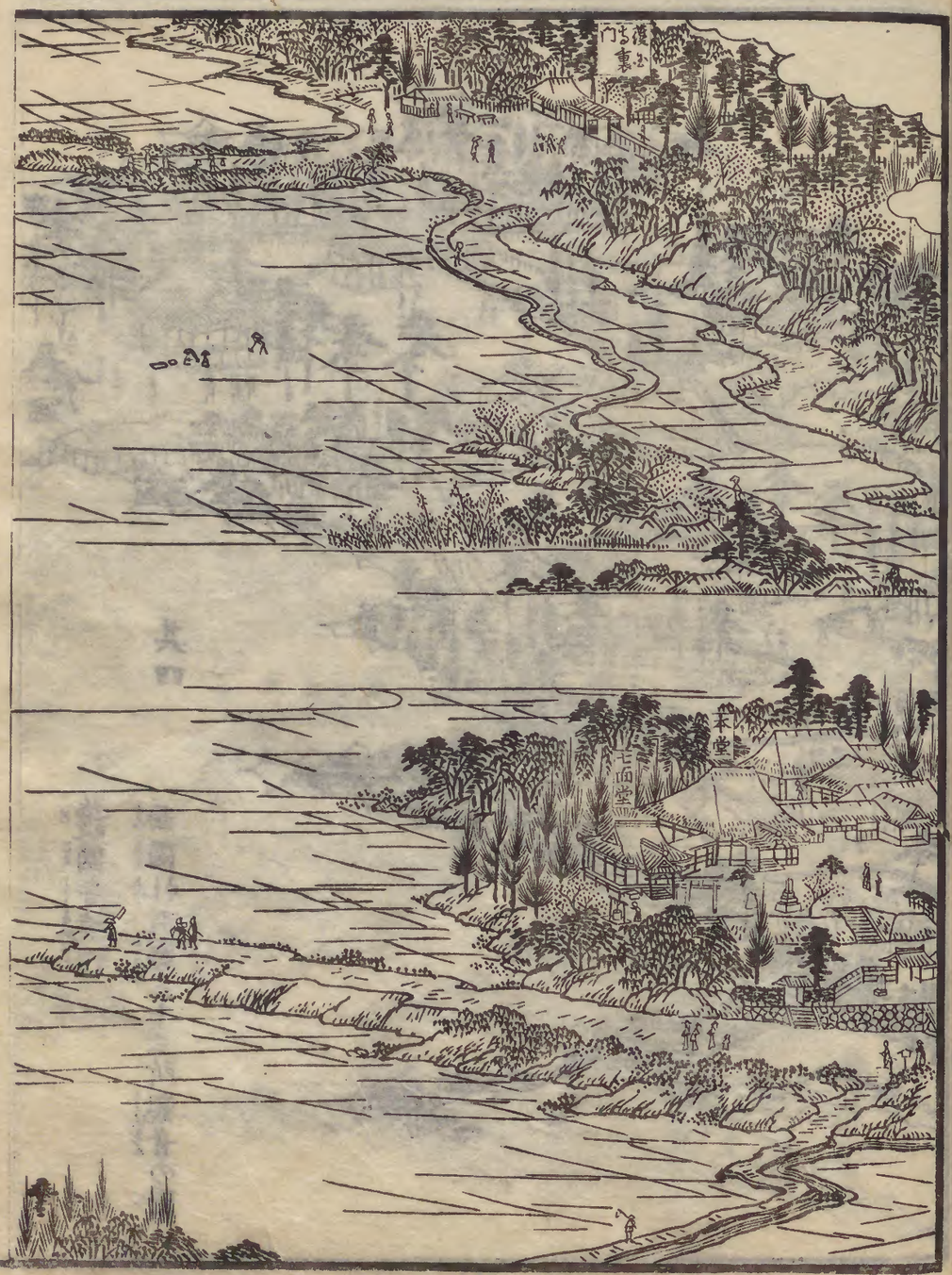
方丈
玄関
護摩堂
聖天
日輪院
五大院


東大塚
護持院
庫裡
中尺門
表門

護國寺

其二

国立公文書館
National Archives of Japan


本堂
七面堂

其三
名本浄寺

其四

護國寺境内
西國札所寫三十三所觀音の圖

九三番
九四番
九八番
九九番
九一番
九七番
九五番
富士
升天
九六番

九二番
九番
十六番
十九番
十四番
十三番
十七番
十八番

其五

護國寺は大塚護國寺の内より近し江城護持の祈願所となる〜めれ筑波山兼帯に坊舎日輪院月輪院と云ふ

山開　毎年三月廿一日弘法大師の浄影供修行あり皆諸人は庭中の林泉を

神巌山護國寺　悉地院と号に音羽町の北にあり新義の真言宗なり和州長谷小池坊に属す開山は賢僧正と号に公より寺領千二百石を附せれ盛大の地なり

古鹿子に云寺領三百石大猷公守護本尊馬脳石観音像開基

本堂　本尊如意輪観世音　瑪脳石にて天然のものなり元禄半の頃前川三左衛門入道道翁と云人異邦に渡り待しを黄檗隠元老師の弟子黒滝の潮音前川氏と師弟の縁あるを以て潮音は授与す後故あり桂昌一位尼公崇敬の由事跡合考に見えたり本堂の柱を蔵柱と云木理猿の面に等しく桂昌一位尼公崇敬の由事跡合考に見えたり本堂の柱を蔵柱と云木理猿の面に等し

薬師堂　本堂左にあり本尊薬師仏昔當寺草創の時此地蟹の池より出現あり霊像なりと〜り今の本堂より西の方の山間にあり天明年間深林を伐開き各其地蟹に因て傍を摸す四時草木の花色

西國三十三番順禮札所写　左右に十二神将の像を置き

歓喜天　境内寿命院に安置し桂昌一位尼公の信仰なりと〜そ永代不退の天下安全の浴油の法を修せ〜めれ寺産を〜

仁王門　仁王の裏ハ置所の廣目増長の二天の像ハ古への火災ハ殘りしとい今宮五社　當所鎮守と云天照太神宮ハ幡大神春日大明神今宮大明神三部大權現五社を祭る　涅槃像大幅　當寺宝物の特野信の筆なり足代を音羽町青柳町櫻水町ホの鎮守なりと云伝ふ

當寺ハ延宝九年二月七日上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢ホ高田浄菜園の地を拓き寺とす依て大聖護國寺と号亮賢初　御在胎の時より浄祈を奉り天和元年ヨ　憲廟將軍の宣下蒙て同年五月廿八日都下新建の大聖護国寺を仁和寺ヨ録院家と依て寺領三百石を附し貞享二年十二月廿八日ヨ大聖護國寺住持法印賢廣黄衣を許る後元禄年中　桂昌院殿一位尼公の浄志ホ浄菜園の地を拓き其頃浄建立あり　江戸密乗最大の梵宇なり結構侈り春時ハ櫻花爛熳と頗る地勢洛の御室ヨ髣髴　武江神寺録ヨ元禄十丁丑相馬彈正少弼ホ命せ再修造なりとあり此地元浄菜園なりを後白山と号し當寺を建立あり　求涼亭式ハ當寺ハ京の清水寺を摸ホ前の町を音羽町九丁あり又音羽河ヨ一条より九条の名あり　涼亭ハ今の舞臺堂宇なり

當寺ホ桂昌一位尼公浄遺物を収らる今猶侍く閼帳の頃諸人ホ拜せむ金銀をちりばめ其結構言葉ハ尽しがたし

星谷の井田地　護國寺の西の谷ヨあり其地を星谷と号す往古此地ヨ星祭を修る行者あり本浄寺の裏ホ塚のことき物あり星産と号け其傍ヨ一ツの井あり此井旱魃ホ水絶を涌せ後埋今ハ水ホ求る人多し此下流ヨ橋を星谷橋と号く

大野山本浄寺　護國寺の西小篠坂あり日蓮宗ホ甲斐の延嶺ホ属せり真珠院日要上人（甲斐上人ハ身延山頭の住主）を以て開基とす始谷中ヨありしを宝永三年此地ヨ移し當寺ホ宗祖上人の像あり

七面大明神　神躰を身延雑形の御像とし往古本山貫首日悦上人紫衣勅許のよつて當寺檀那大野氏藤江何某勲功少なからざるに故ふ是を謝せんとて宝蔵より收るゝの七面大明神の像を大野氏へ授与す　今ト部朝臣吉田兼連書もて額あり九月十八日祭祀あり前夜参詣あり

大黒天　日蓮上人安房の清澄に在し頃虚空蔵の前に智恵を祈り読経数万遍及び青梁香を焚く其灰を集め弘安三年に大黒天の像を造らく則背面に其灰を記す日蓮上人の真筆なりとあり

此經尊日蓮日讀以青龍凍之五百歳後流布

是生印

此霊像を日親上人感得あり〻〻證書を添らる後横井氏某當寺へ収蔵すと

いへり　是生と八日蓮大士清澄寺の道善を師とし落髪深衣の後道善命もて和の名あり

御嶽山清立院　護國寺の裏門より雑司ヶ谷鬼子母神へ移道の右側小坂に傍てあり雑司ヶ谷本竜寺の持とす　嶽を号つる常唱堂に安置和の宗祖上人の霊像八日法上人の真作なりとの相伝ふ

正嘉年間関東疫疾流行する頃行脚の沙門此草堂に投宿の間此地の人に病患を救ひ又別れに臨むの時此霊像を止め置くとて

此影像威霊あり後世新に別像を造る日法　日親上人影堂同常唱堂

上人作の像をバこの新像の胎中に収むるとなり

の前にあり元和年間當寺の住僧日意師と請雨松　堂前にあり千魃の年八農民この木に集り請雨を當寺の

いへる沙門感得せし影像なりとへ

日蓮上人の影像八乞雨に霊験あり〻〻郷人大に信敬せり此樹下に存する和の石像八日意師の彫像なり

雑司ヶ谷鬼子母神出現所　本浄寺より南にあり此地を清土とふ

蒼林の中に小社あり則雑司ヶ谷鬼子母神出現の地なり同神を鎮まり社前にあるの井泉を星の清水と号へ往古鬼子母神出現の項此井に星の影を顕現せしあり名つくるとなり

其井形三の形

桟る　土俗三角井ともいふ

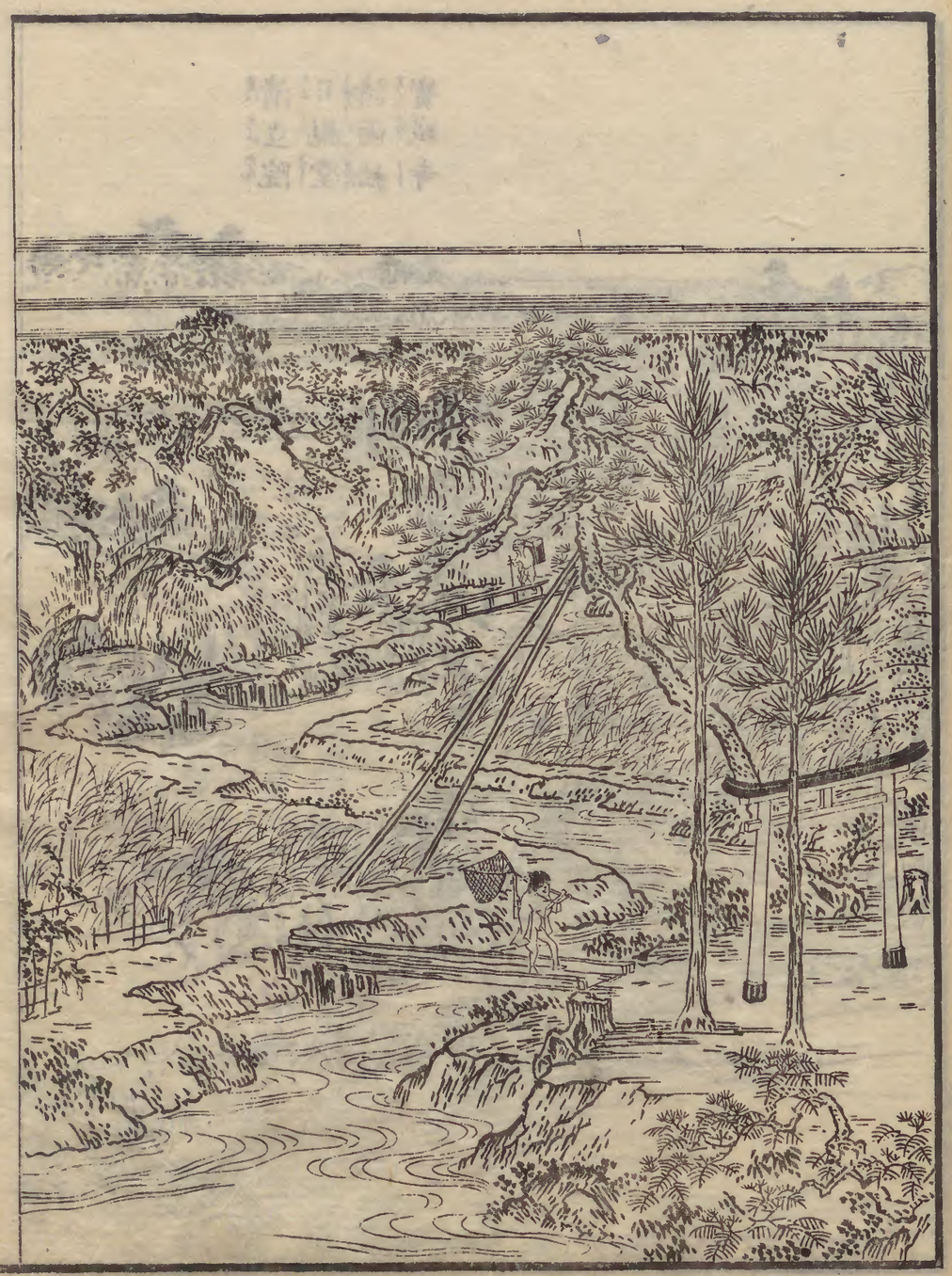
不動山宝城寺　清立院の西の小坂を隔てあり豆州玉澤の法華寺に属す當寺安置の日蓮大士の影像八大覚大僧正の作なりと

諸人結縁の為正五九月の十三日内拝あり又毎年十月八日より十八日迄法華経讀誦千部修行あり

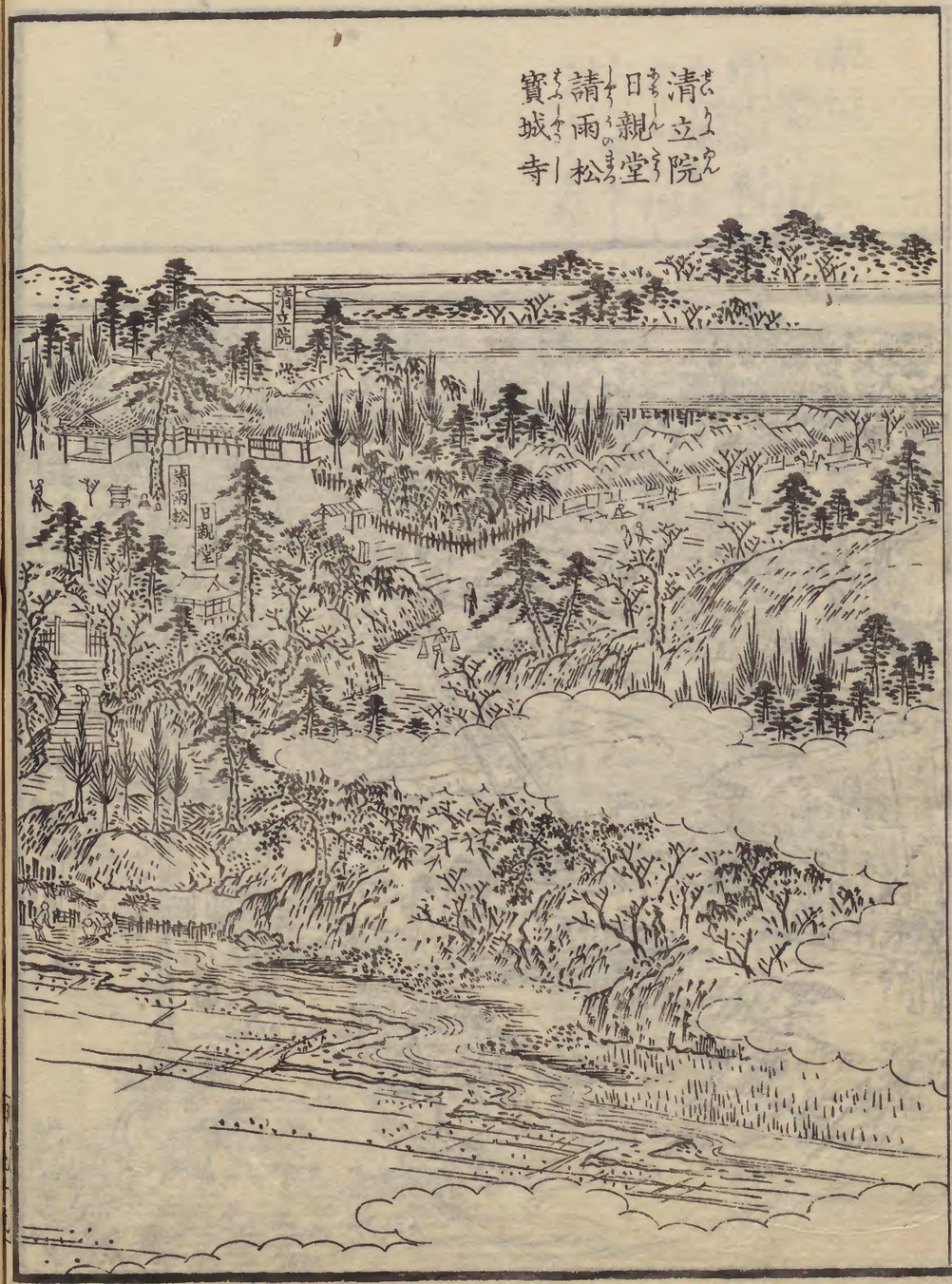
妙永山本納寺　鬼子母神の堂前東の方に小路左の側にあり法明寺に属せり當寺に九老僧八日朗上人の像を安せ徒弟所謂日印日像日輪日典日澄日善日行日範朗慶等なり

當寺へ慶安三年庚寅實蔵院日相上

清土
墨の清水
雑司谷鬼子母神
の出現あり
七本杉と云
ふ一根ゆ
七つよりわれり



清立院
日親堂
請雨松
寶城寺



国立公文書館
National Archives of Japan

人間基〻天神地祇人鬼勸請三宝の諸尊ふ日月星の三
護法堂と号す
光天を安せ毎月十七日の夕より廿三日の曉まで三光同時に
昇天の旦を待終夜誦経唱題怠慢なし是を十夜待と
いふ

鬼子母神堂　雜司谷にあり法明寺の支院大行院の持なり

本殿鬼子母神　銅像　鬼子母神一名を訶梨帝母天と称す　相殿　円満具足天鬼子母神の妻　十羅刹女　同　子

鷺大明神祠　堂前左の方にあり　祭る神詳　或云出雲國神戸郡鷺村の鷺浦に鎮坐し素盞嗚尊の妃女皇諸女なりと　正徳の頃松平羽州侯神告に依て是を勸請す

此神ハ疱瘡の守護神なり　例年八月朔日祭あり

疱瘡寄願の草　廣前の小石を拾ひ得て守護とす

毎月朔日を以て　天照太神宮と八幡太神宮と相殿に合祭す　地主の神なり

徽日　社前にあり世に銀杏樹と云　石像二王尊　和田戸山盛南山と云寺より自證院殿

銀杏樹　子授銀杏と号す　鬼子母神と書せり

華表　紫銅　本向弥光悦の作　鬼子母神の額に鬼子

正月十五日　前夜一山の僧徒本殿に集り法華経を讀誦す　同十六日　辰刻一山の僧徒本殿に集會し法華経讀誦す　其式ハ射手六人各小屋に入

終て祝詞酒　同日奉射　上俗ひやと唱へヒフ音通す　屋より幕の中に介添の者より弓矢と敷皮とを

清取の間式あり　後射手壹人矢六筋を放つ都て三拾六筋あり日記付

采配振矢取介添各式あり　射手六人射終て後一番より次第に小屋に入

此間一山の僧侶又氏子の輩集會し酒五南みて終る此式天正文禄の頃

記録も不束なり　寛永十一年長島内匠助戸梁唯兵衛と云る人式を記し

後世に伝ふ　此長島氏ハ此所の地主なり今大門左右に繁茂

もる不の棚乃列植も此人鬼子母神へ寄進して栽られと云

日

鬼子母神衣替

同十八日　万巻陀羅尼修行　四月八日　衣替　五月十八日　万巻陀羅尼讀誦　六月十五日

此地の農夫集て社頭の草刈拂ふ草薙　衣替　同十八日迄　九月十八日

万巻陀羅尼讀誦　十月八日　衣替　十八日まで　恭詣　群集す　追儺

当社の追儺　是と會式詣と云近世ハ廿三日まで　恭詣

僧徒内陣に候て陀羅尼品を誦る　男女社壇に群集して誦経唱題を聲尤置院主以下一山の

の男女爭て　十三巻終て前の供豆を打出す　群集

是をひろう

縁起云此本尊ハ永禄四年辛酉五月十六日此地山本氏田口氏なる者

連綿子孫今猶　池水に星の現を見て後地を穿ち鍬下に是を

得たりしなり　今護國寺の西に其出現の旧蹟あり星の清水と称す　依東陽坊第五世日性師に

贈東陽坊ハ今の大行院なり　乃佛殿に安し十有余年を歴て然に安房

國の沙門某　名知日性師に仕へるるに思ひ寄密に此靈像を

雑司谷鬼子母神堂
門前茶屋
酒肉売茶
仙人堂
供茶
いろり
あらや

法明寺
叡覚寺
弦巻川
二王門
石二王
茶や
大門
茶屋
五元集
雑司谷
七里ハ
人と
あれの
其角

雜司谷の會式は毎年
十月八日より十二日迄俗
沙も系詩の業と同く
六日の夜より廿二日の夜迄
群集して稽古の如く
なる中央に桜樹用本偶
よの飾物を做々なる
きも宇治上人一代の
間のまと造りなり
一宗異色
其功勞を家つの徒よ
示さんとなり

菊翁話
伐性
出會
藻

盗み故郷に帰るに其年天正五年なり忽病を発し一日自口たるそいくく
我は元武州雑司谷なり彼地の衆生機縁既に熟せ正に済度せ
んと時を始めく泥土より出現せしを移せるに我意にあらず
直に元の地に帰せしなり時に村人大に怖れ畏み再び東陽
坊に迁しまる仍諸人霊威あるを知りて草堂を営み
とく往古より稲荷の社跡と云伝へる叢林を聞き竟に天正六年
戊寅四月十日に始めく斧を下し同五月朔日経営落成しあるに
安置せ後覚文六年に至て自証院殿新に寶殿を造立せる
今の本殿是なり自昌院殿は加州
黄門の息女にして安藝大守の令室
此地は遥に都下を離れ
あるに恐るに常に詣人絶えを依く門前の左右に
貨食店軒端を連ねり十月の會式には殊更群集絡繹として
織るに風車麥菓細工の獅子川口屋の飴を此地の名産とす

此地にて製する所の麥菓細工の獅子は昔高田氏家町
小作久米女と云る者その人の母に孝なり
家元より貧しきを孝養仏のまくうねと
かけきたる茶屋の鬼子母神へ詣で涙く
寛延二年の春の頃
ひつきて麦菓
なりてもひの
角麦獅子の形と
造り色と造りて
商ひよりしの求る
人多し竟に
獅子の名高くなる
堂へ参詣する者
多く此地の産
ひとりのみなり

又當山ハ花の名所なり近年境内ハ櫻数多植て往昔ハ後せ
しめんと
（七条家分限帳江戸雑司谷太田新六郎所領）
麥藁細工角兵衛獅子ハ昔高田四ッ家町ハ住し条とする
女子製し初りとハ此条女ハ母一人ありしう家貧しく孝
養心のまゝ常ハ雑司ヶ谷の鬼子母神へ
詣し深く此事を祈願し其至孝の冥慮ハ
有ん寛延二年の夏麥藁を以て角兵衛獅子の形を造り
そのうしろ項雑司谷の鬼子母神ことハ参詣多うもし頃
なりハ此獅子を買ふ人影しく竟ハ麥藁細工のあハ元身
さうえんハ夫より後ハ心もとなく母を考ふとの
百度参寄願あるとの事社前と往返し百度系拝を是を俗ハ百
度詣と号し或人云く此ハ当社鬼子母神を以て樹奥とし
名ハ十羅刹女と始とし十人の子子千人の子子千足揃のうしろ意して十と千との
間を取り百度詣まつるとの事国皆此方
威光山法明寺　同北の方ハあり支院ハ宇あり最古刹ハ閑
寂なる寺院なり　庫裡ハ鉈作なり　昔の釋迦堂　釋迦如来石像　銀杏樹　同一堂前ハあり往古擁
釋迦堂　余堂中ハ千躰仏を安す　祖師堂　同釈迦堂の右ハ宗祖中ハ宗祖
いへハ山ハあるハ唯ホ一ッ旧樹ハ枯て若木　日蓮大士の影像を安す立正
鬼子母神の前ハあり雄木ありとの　当寺日源上人の弟子三祖大義卿日蓮上人修
安國論演説の躰想を当寺日源上人の弟子項夫婦ハ大願あり当寺の
飾を施す　楠正行の息女ハ如典入道某の室ハ
壇越なり應永十二年乙酉の再ひ此影像の彩色を加へと云伝
弘仁九年戊戌飛騨匠作なり　古当寺真言宗　源家累代祷の護摩
堂ハ今も　往古式武夫横死の難を逃れ報恩の為旧
昔のまゝ　釋迦如来石像　雑司谷より板橋へ移方の道端ハ此地ハ
その傷ハ志趣を　鯨鐘　同所ハ寛永三十二年甲申鋳せし洪鐘
記せし石碑を建し　銘文ハ略を鐘の縁ハ曲尺拝天邦ハ筆
盤竜の形を鋳付し　諸人見て奇異とす　撞ハ度量衡の意を表しとの
時い新しも亦教ハ預りて此形を鋳附し　鯨鐘
樵の南日蓮宗法性寺ハあり　左右ハ金剛密迹の像を置く
二王門　運慶の作なり
正月元日　同三日迄本方ハ釈迦堂ハ千巻　二月十五日　涅槃
古法の式例あり　同十三日　陀羅尼修行あり　会
音楽練供養あり　四月八日　誕生会上ハ同一同日ハ夏の間説法あり　五月十三日　釈迦堂ハ千巻陀羅尼修行あり　七月
七日　虫拂　九月十三日　千巻陀羅尼讃誦修行あり　十月六日　同七日八日迄の間前ハ花市立　同日
経揃と唱へ誦経す　此日ハ会式中練供養修行あり

同十三日御影供（俗誤て御影を塔中寺院各飾物をまつる）八日より廿三日迄条例

相伝の當寺ハ弘仁元年庚寅草創ゆゑ往古ゟ真言宗の道場なりしを（或云慈覚大師の開創なりと）正嘉元年丁巳嚴誉律師駿州岩本の実相寺ゟ日蓮上人の法を聞直ゟ宗風を移し上人の弘法よりなり乃法号を嚴誉院日源と称す（當寺開山是也中竪秀坊と云ふ駿州賀島の実相寺ゟ住を学行群ゟ秀とのつ按ゟ寺伝ゟ當寺の山号威光と云を以て東鑑ゟ載る所の威光寺と書ゟ大ゟ誤なり）

弦巻川（當寺二王門の前を東流る細き溝川を号く古へハ布引川とも唱へ同郡三巻小山田の条下谷口天神の下ゟ詳なり）

迎へ出く音羽町の西の方を歴く江戸川ゟ合せる（いにしへとも共ゟ由縁を考ふ水源ハ池谷の辺ゟ發し下流ハ清土の）

大行院　鬼子母神の別當なり往古ハ東陽坊と云天正年間加州産の始祖前田利家朝臣建立せしなり堂内ゟ日蓮上人の徒弟六老僧の影像を安置す（日像日照日朗日興日向日頂以上六老僧なり或人云く此像ハ始谷中感應寺ゟあり彼寺改宗の頃一躰行失しなれ残を當寺へ収るとも）小畑勘兵衛尉景憲檀那寺なり仏ゟ彫刻しく納む又自らの肖像もあり（此堂ゟ安置す）

當院ゟ宗祖歴代の真筆なる上古の調度等を収蔵す（其余深草不可思議の経類多あり）

蓮成寺　同東ゟ隣る當寺ハ本山十三世日延上人の開創なりと

十八老僧の像を安し（日源日家日保日弁日法日傳日位日秀日忍日門以上天目日得日合日賢日高日實日禮日祐十八人なり）

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan